Z32-B88

修監 馬生島有 村藤崎島

金の船

十二月號

大正八年十二月一日發行 大正八年十一月四日印刷納本

大正八年十月十六日(第三種郵便物認可)(毎月一回一日發行)

第一卷 第二号

国立国会図書館 8. 3. 26

△沖野岩三郎先生著▽

□富本憲吉先生裝幀□

最新刊

四六版百九十九頁

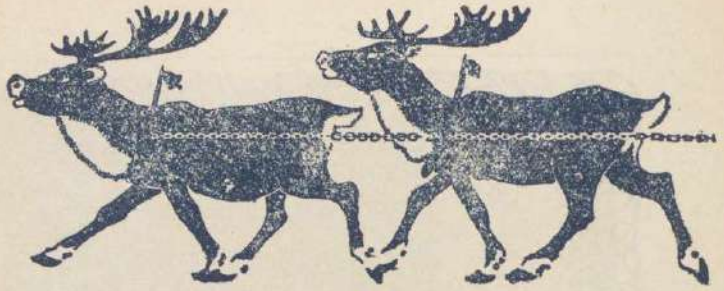
「熊と猪」といふ大へん面白いお話を本誌へ書いた沖野先生の、面白い〳〵お話を十六篇、あつめたものです。是非皆さんに讀んで、戴きたうございます。「定價は金壹圓」「郵税」は「六錢」です。

そして「振替番號は東京五五參番」でございます

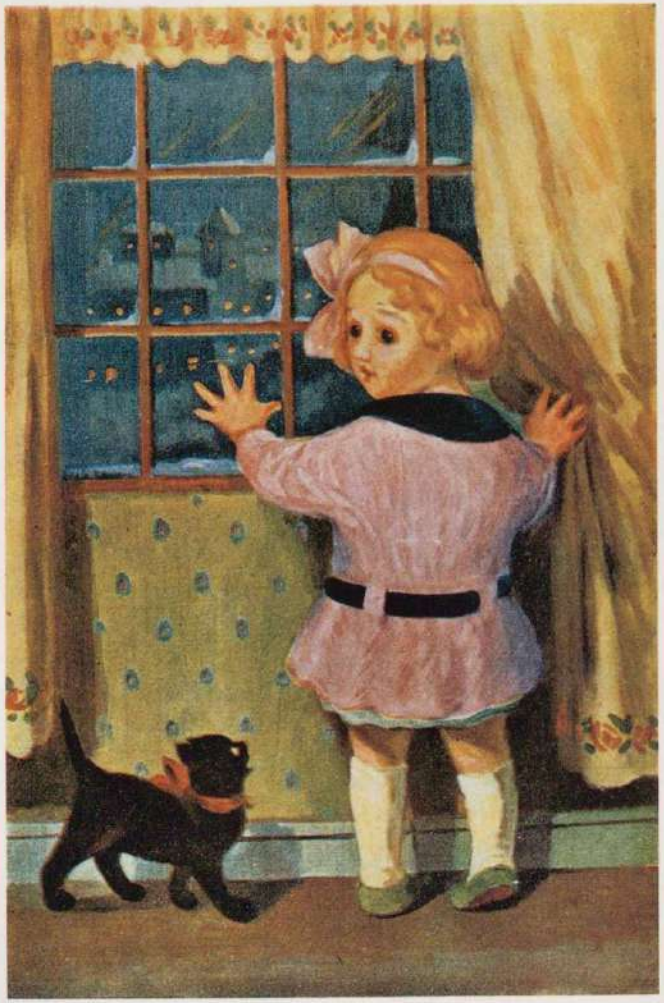
■發賣元■ 東京、京橋、尾張町 振替東京五五參番 電話新橋一五八七番 警醒社書店

「金の船」第一巻第二號

サンタクロースの
お爺さん（表紙、石版刷）……岡本歸一
クリスマスの前夜（口繪、三色版）
こほろぎの唄（頌詩）……中山晋平
雪降りお婆（童謡）……二……野口雨情
熊と猪（童話）……四……沖野岩三郎
青い目の蟹（童話）……三……前田晁
とりかへつこ（繪話）……六
象と旅人（童話）……三……齋藤佐次郎
雪よ來い來い（童謡）……四……若山牧水
サンタクロースの贈物……五……山本作次
痩せ犬とお獅子……六……吉田絃二郎
太陽をとつた話（童話）……四……橘逸雄



「なんだ君か」（繪話）……四
親鳥小鳥（童話）……四……德永壽美子
冬の日（童謡）……四……野口雨情
お月樣のおはなし（童話）……五……長田秀雄
喧嘩の相手（童話）……六……横山壽篤
黑姫（童話）……六……齋藤佐次郎
さアさア學校へいそぎませう（童謡）……七……若山牧水
幼年詩……七
童謡……七
綴方……七
自由畫……七
通信……七
さし繪……岡本歸一
製版……田中松太郎



クリスマスの前夜

クリスマスの前夜でありました。アンナさんは、雪が眞白に積って、お月樣の光で、キラ〳〵輝いてゐる外をながめながら、嬉しさうにいひました。

『まあ、きれいなこと、サンタクロースのお爺さんが、いらつしるやうな晩だわ。』「サンタクロースの贈物」第三頁

こほろぎの歌（「金の船」曲譜その二）

作曲　中山晋平
作歌　長田秀雄

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
斧もなければ牙もない。

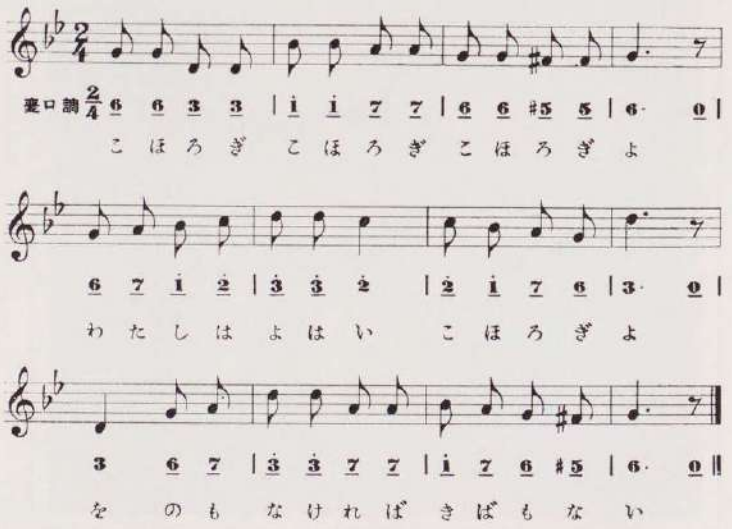
こほろぎ、こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
爪も鋏も持ちませぬ。

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
何時も淋しく泣くばかり。

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
唄をうたつて日をくらす。

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
友をたづねて泣きまする。

（五十二頁「お月様のおはなし」より）



雪降りお婆

野口雨情

泣く兒は
歸れ
雀と歸れ

一軒家の背戸に
雪五合
降つて來た

山の山の
奥の
「雪降りお婆」

一里も二里も
雪負つて
飛んで來た

「雪降りお婆」とは、蟲の名です（方言）。この蟲が飛んで來ますと初雪が降る知らせだと云つて居ります。綿雪のやうに白い小さな蟲で、東京にも居ります、多く夕方飛びます。

熊と猪

沖野岩三郎

一

紀州の山奥に、佐次兵衛といふ炭燒があるました。五十の時、妻さんに死なれたので、たつた一人子の京内を伴れて、山の奥の奥に行つて、毎日々々木を伐つて、夫れを炭に燒いてゐました。或日の事京内は斯んな事を言ひ出したのです。

『お父、俺ア、もう斯んな山奥にゐるのは嫌だ。今日から里へ歸る。』

『そんな馬鹿を言ふものぢやあ無い。お前が里へ出て行つた日には、俺は一人ぼつちになるぢやないか。』と言つて佐次兵衛は京内を叱りました。

『お父は一人でも宜いや、大人だもの。俺ア子供だから、里へ行つて皆なと鬼ごつこをして遊びたい。』

『そんな氣儘を言ふものぢや無い。さ、お父と一緒に木を伐りに行かう。』佐次兵衛は京内の手を取つて、引張つて行かうとしました。

『嫌だ、ヤだ！　お父は一人で行け、俺は里へ遊びに行く！』と言つて京内はドン〳〵と山路を麓の方へ駈けて行きました。

『おい、こりや、夫れは親不孝といふものだぞ！』

『不孝でもコーコーでも宜いや、里へ行つて遊ぶんだ。』

京内は一生懸命に駈け出したので、佐次兵衛も捨てゝ置けず、お弁當を背負うたまゝ、バタ〳〵と其の後を追かけました。

二

山の上には、大きな熊が木の枝に臥床を作つて、其所で可愛い可愛い黑ちやん—人間なら赤ちやん—を育てゝ居ました。

『さ、オッパイ！　オッパイ、お食り、賢いね黑ちやん。』

熊のお母さんは黑ちやんの頭を舐めてやりました。

『オッパイ、嫌よ。もつと〳〵旨しいもの頂戴な。』

『オツバイが一番旨しいのよ。ね、駄々を捏ねないで、さ、お食り……』

『嫌だつて云ふのに、乳頭を噛み切つてやるぞ。』熊は黒ちやんでも、なか〳〵惡口は達者と見えます。

『アイタタ、まあひどいわ。母ちやんの、お乳からこんなに血が出るぢやないの。』お母さんは、ちよいと睨む真似をしました

『お乳は嫌、もつと〳〵旨しいもの、頂戴。』

『そんな無理を、お言で無い。それは親不孝といふものです。』

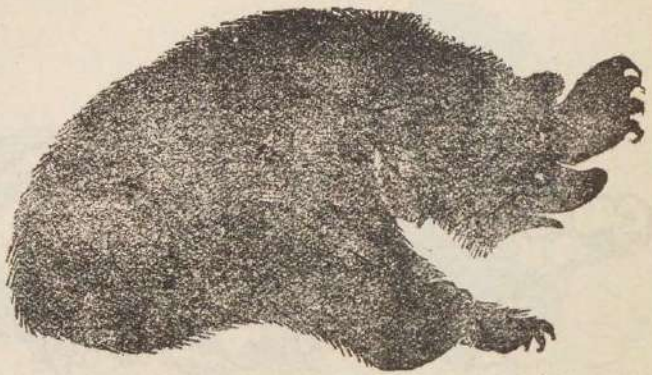
『不孝でも宜いわ。もつと旨しいもの食べさしてお呉れ、え、お母さん。』

『仕様が無いね、此の子は、』とお母さんは暫く考へましたが、

『坊やは何が好き？　蟻？　栗？』と、たづねました。

『嫌だ〳〵、そんなもの皆な嫌だ、もつと〳〵甘くつて旨しいものが欲しい……』と、黒ちやんがいひました。

『困つた事を言ふのね、あ、さう〳〵蟹……、蟹を食べた事があつて？　あの赤ァい爪のある、そうれ横に、ちよこ〳〵と



這ふ……』と、お母さんが、また優しくいひました。

『食べた事が無いの、夫れ旨しい、え、本當に旨しい……』

『え〳〵、夫れは本當に旨しいのよ、母さんが谷川へ行つて、うんと捕つて來てあげるから、此所で溫順しく待つておいで。』

『イヤ、イヤ、坊も一緒に行く。一緒に行く。』と足摺をして黒ちやんが、强請りました。

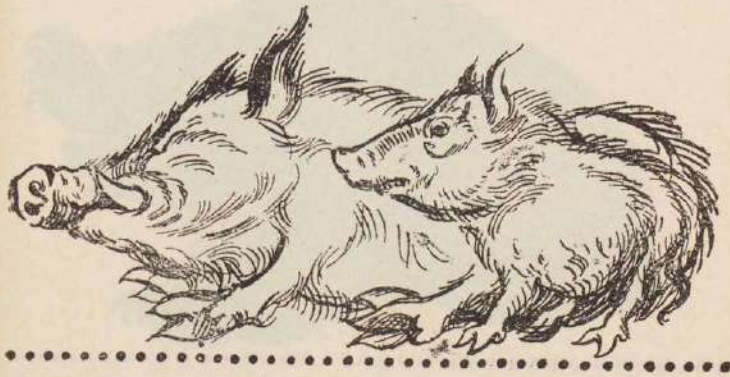
『此所に溫順しくしておいで、ね、賢い兒だから……』と言つて、お母さんは黒ちやんの背を平手で優しく叩いてやりました。

『嫌だ〳〵、一緒に行く。伴れてつて呉れなければ耳を噛み切つてやる！』と、黒ちやんが泣きながら言ひました。

『アイタタ、何といふ亂暴な子だらう、此の子は。よし〳〵仕方がない、伴れてつてあげよう。さ、そうつと降りるんだよ。おつこちて怪我をしないやうに、』と、お母さんがまた言ひました。

三

また、丘の所に大きな猪が坊やと一緒に臥てゐました。お母



さんは、坊やの脊を叩きながら、『坊や、もう段々お書になつて來るから、寢んねするんだよ。昨晩は能く遊んだね。狸を脅かしてやつたつて、夫りやあ偉かつたね、坊やは小さくても猪だから、狸位何でも無いね。』

猪のお母さんは、頻りに坊やを臥かしてゐましたが、いつの間にか、うと〳〵眠つてしまひました。惡戯つ兒の坊やはお母さんの眠つてゐる間に、そうつと、山を下の方へ降りて行きました。

『坊や！　坊や！』と眼を覺したお母さんは、きよろ〳〵其所らを見廻しましたが、坊やは何處にも居ません。で、屹度谷へ水遊びに行つたに違ひないと思つて、矢のやうに、山を下へ〳〵と駈け下りました。けれども、坊やは谷へは行かないで、大きな樫の木の所で

『やあい、お母さんは僕を知らないのかつ。』と云つて獨りで嘲笑つてゐました。

四

熊の親子は谷川へ下りて來ました。

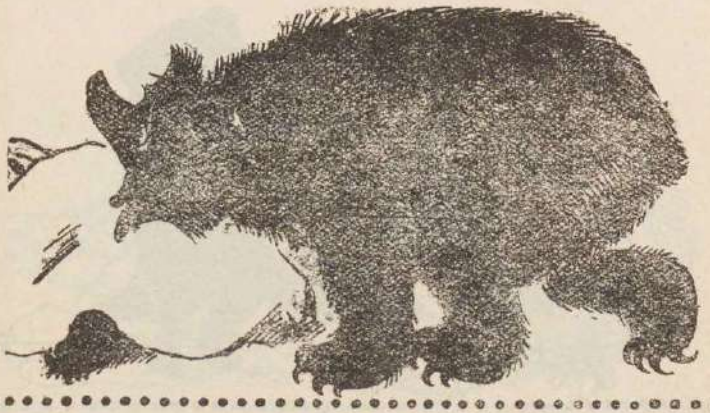
『此石の下には、屹度蟹が居るよ、さ、お母さんが斯うして、石を引起して居るから、坊や、蟹を掴んでお捕り……』

熊のお母さんは、ウンと力を入れて、平たい五六十貫もあるやうな石を、引起しました。すると爪の赤い小い蟹が六ッも七ッも、ちよこ〳〵と逃げ出しました。

『あ、居る〳〵、澤山居る。』と黒ちやんは夢中になつて、蟹を捉つてゐました。

所へ山の上から大きな猪が、どん〳〵と走つて來ましたが、谷の中でピチャ〳〵水音がするので、屹度坊やが居るのだと思つて、藪の中から大聲で、『おうい、お前は何うしてこんな所へ獨りで來た？』と嗾鳴りながら、岩の所からぬつと顏を出しました。

熊のお母さんは、不意に猪に嗾鳴られたので、吃驚して思は



ず、引起して居た石から手を離しました。

『きやあ！』と言ふ聲がしたのに氣付いて見れば、可哀さうに黒ちやんは、大きな石の下になつて死んでゐました。

さあ大變です。熊のお母さんは氣狂の樣になつて、

『大事の〳〵黒ちやんを殺したのは貴樣だぞ！　覺えてゐろッ！』といひながら猪に向つて爪を剝き出しました。

猪は自分の子が死んだのだと考へ違ひをして、

『貴樣は大事の〳〵坊やを、其石で壓へ殺したな。今に敵を討つてやるぞ！』と、叫びながら、鋭い牙を剝き出しました。

熊と猪は、かみ合ひました。そして、日の暮れまでもお互ひに爭つてゐました。

五

京内が里の茶店でお菓子を買つて貰つて、佐治兵衛に伴れられて山小屋へ歸つて來たのは、其の翌日でありました。

『さ、もう駄々をこねるんぢやないよ、お庇で昨日今日は二

人とも遊んで了つた。』と云ながら、二人で谷川へ水汲みに行つて見ると、これはまあ何といふ事です。大きな猪と大きな熊が、二疋共引掴かれて、嚙切られて、大怪我をして死んで居るぢやありませんか。しかも二疋とも大きな石を腹の下に抑へて、頭を並べて死んでゐました。石の下からは小い黒い足が二寸ばかり見えてゐました。

佐次兵衛が猪と熊とを引除けて、石を引起した時、京内は可愛い可愛い熊の子が、赤い舌を出して死んでゐるのを見まして、ポロポロ涙を流しました。

『なア、畜生でも……これは屹度この小い熊の子の爲に親同志が死んだのらう……』と云つてゐる時、藪の蔭からコソ〳〵と小い猪の子が出て來てまた隱れて了ひました。

佐治兵衛は此の三疋の獸を叮嚀にお葬式してやりました。

夫れから京内は大變孝行な子供になつて、一生懸命にお父さんと一緒に働いて名高い炭燒になりました。今に木炭は紀州の名高い產物の一つであります。（をはり）

青い目の蟹

前田晃

ぽか〳〵と暖い日でした。鞠子さんはいつものやうに濱邊へ行つて、綺麗な貝殻などを拾ひ歩いてゐました。其うちに、ふと、其の砂の上に、丁度鞠子さんの指がはひるくらゐな丸い穴が、幾つも幾つも、あいてゐるのを見つけました。

『何の穴だらう？』

鞠子さんはさう思ひながら、ぢつと其の一つを見てゐますと、中からひよつこりと、可愛らしい蟹が出て來ました。

鞠子さんは手早くそれをつかまへました。が、其小さな蟹は、大きな鋏と小さな鋏と、二つ共に靜かに縮めたまゝで、外の蟹のやうには挾まうともしません。ただ可愛らしい二つの目玉を、青くぴか〳〵と光らせてゐます。鞠子さんは不思議に思つて、其の小さな蟹をぢつと見つめてゐました。

すると何處からか、

『嬢ちやん、其の蟹をいぢめてはいけませんよ。早く放しておやりなさい。』といふ聲がきこえました。

鞠子さんはびつくりして、顔を上げてあたりを見まはしました。しかし人らしい姿は何處にも見えません。ただ向ふの蘆の生えた入江の方から、白鷺が一羽、ぴよこん、ぴよこんと歩いて來たばかりでした。

『あの鷺が聲をかけたのか知ら？』と鞠子さんは思ひながら、其の小さな蟹を直ぐに放してやりました。蟹は嬉しさうに、ちよろ、ちよろと走つて、また穴の中にはひりました。

鷺はだんだん鞠子さんの方へ近づいて來ました。時々何か考へ事でもするやうに、ちよつとの間、片脚だけで靜かに立ちましたが、其の脚は長くて大層痩せてゐました。

そのうちに、鷺はたうとう、鞠子さんのそばまでやつて來ました。そして片眼を閉ぢて、かしげた小首をすぼめながら、まるで白い羽根の毬のやうになつて、片脚で立ちました。其の足はすつかり濡れて、日にきら〳〵と輝いてゐました。

『嬢ちやん。』と鷺がいひました。『あなたは、あの蟹が、なぜ砂に穴を掘るのか御ぞんじですか？』

『なぜ？』と鞠子さんがおづ〳〵と言ひました。

『では一つお話しませう。さうすれば、わたしが蟹をおにがしなさいと言つた譯も分ります。』

さう言つて鷺は一つ瞬きをしました。

『ずつとずつと以前の事です、小さな白壁の町が、ある海邊にありました。何處だか場所は分りません。ただ海邊といふ事が分つてゐるだけです。其の頃はまだ、世間に人が澤山ゐない時分でしたが、中でもその町の人達は

至極仕合せに暮してゐました。第一、其處には大したお金持が一人もありませんでした。お金などはなくとも、みんなが仕合せに暮せたからです。

『其町を一人の王女さまが治めてゐました。其の王女さまは大層賢い、そして善い方でしたから、町ぢうの者は誰も彼もみんな敬つてゐました。そして王女さまは海が大好きでした。毎日御殿の窓から青くきら〳〵と輝いてゐる海を眺めてゐました。

『所が幾年か前、其町に住んでゐた一人の靴直しが、隣の家の物を盗み

ました。それを其の頃の王さまであつた、王女さまのおとうさまが大層お怒りになつて、其の男に罰として、この町を去つて二度と再び歸る事はならぬ、とお吩咐になりました。靴直しは仕方なしに町を出て行きましたが、其の時、いつか歸つて來て仕返しをしてやるから、……と王さまに言つたのでした。其の言葉を、みんなは暫くすると忘れてしまひましたが、靴直しは全く本氣でしたから、急いで次ぎの國へ行くと、其處に住んでゐた名高い魔法使の弟子になつて、永い間、辛抱强く魔法を學びました。そしてたうとう師匠が知つてゐるだけの事は、みんな覺えることが出來ました。

『靴直しは、いろ〳〵な魔法を覺えて、白壁の町へ歸つて來ました。王さまはもう亡くなつてしまつたけれど、王さまの娘さんが後を繼いでゐるのを知つて、この王女さまの上に、長い間の恨を返さうと心を決めました。そこで靴直しは魔法を使つて、王女さまを蟹に變へてしまひました。しかし、どんな魔法でも、人の目の色だけは、變る事が出來ません。王女さまの目は青かつたものですから、青い目をした蟹になりました。

『このことを知つた町ぢうの人は、どんなに悲しんだでせう。みんなは其の呪を解く爲めに、一等えらい魔法使を世界中に探しました。そしてやつとのことで世界一の魔法使を見つけました。其の人はすばらしく年を取つた、髪も髯も眞白な人でした。其の年取つた魔法使が言ひました

た。「王女さまを元通りにする法が、たゞ一つある。それは千年毎に一度、海から打ち上げられる青い石を見つけさへすればよい。さうすれば王女さまは救はれる。」

斯う魔法使のお爺さんが云つたので、町ぢうの者は寄つて相談をしました。たとひ王女さまをお救ひ申すことは出來ないまでも、せめて其

の苦しみを分つだけのことはしようといつて、男も、女も、おぢいさんも、おばあさんも、小さな子供達も、みんな一處になつて、魔法使の前に出ました。そしてみんなを蟹にしてくださいと頼みました。そこでお爺さんは魔法を使ひました。するとみんなは王女さまと同じ蟹になりました。そして王女さまを護りながら、濱邊といふ濱邊に沿うて、其の青い石を搜しにさまよひ出ました。蟹達は一日も休まずに、青い石を搜してゐますが、いまだに見つかりません。

『御覽なさい。』と鷲は向ふの蔦の生えた入江の、平たい岸の方へ目を向けながら『今日はあすこからこの邊へかけて掘つて居ります。奇態な事に、あの蟹は、人がつかまへても決して、はさまうとはいたしません。誰にも害は加へません。たゞ穴を掘つて進んで行くだけです。が、時々相圖でもし合ふのでせう。すべての蟹が銘々の穴の口に立つて、青い目を日に輝かしながら、暫くぢつとしてゐることがあります。人々はあの蟹を廻國蟹と呼んでゐます。嬢ちやん、あなたはあの蟹を廻國蟹と呼んでゐます。人々はあの蟹達が、實は小さな白壁の町の人達で、今でもなほ王女さまを護りながら、青い石を搜し歩いてゐるのだといふことを忘れてはいけません。』

鞠子さんは一心になつて聞いてゐましたが、話が急にぽつりと終つたので、鷲にお禮をいはうと頭をあげて見ましたが、鷲はお禮などを待つてはゐませんでした。いつかもう長い脚で、びよこんびよこんと大跨に歩きながら、水際の方へ下りて行きました。

鞠子さんは其の後を見送つてゐましたが、廻國蟹のことを大層可哀想に思ひながら、濱邊傳ひにおうちの方へ歩き出しました。（をはり）

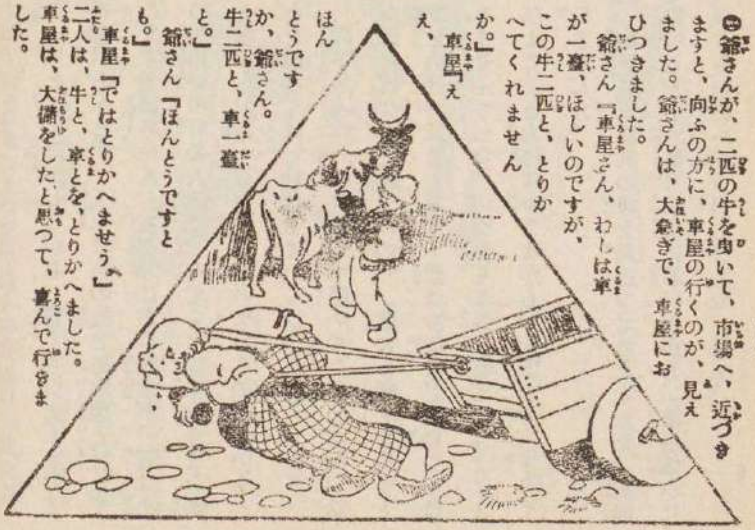
とりかへつこ

㊀ロシヤの田舎に、爺さんと婆さんとがゐました。二人は、牛を二匹、もつてゐましたが、車がないので、いつでも、あつち、こつちで、借りてゐました。しかし、あんまり、いくども、いくども、借りに行くので、しまひには、どこの家でも、もう、借してくれなくなりました。それで、二人は、いろ〳〵、相談した上、二匹の牛を賣つて、車を一臺、買ふことにしました。で、爺さんは、あくる日、さつそく、二匹の牛を曳いて、市場へ、出かけて行きました。

㊁爺さんが、二匹の牛を曳いて、市場へ、近づきますと、向ふの方に、車屋の行くのが、見えました。爺さんは、大急ぎで、車屋にお ひつきました。

爺さん『車屋さん、わしは車が一臺、ほしいのですが、この牛二匹と、とりかへてくれませんか。』

車屋『ええ、ほんとうですとも。』



車屋『ではとりかへませう。』

二人は、牛と、車とを、とりかへました。車屋は、大儲をしたと思つて、喜んで行きました。

㊂爺さんは、車に繩をつけて、うん〳〵いつて、曳いて行きました。しかし、一丁ばかりも行くと、ぐた〳〵に疲れて、路ばたで、休んでゐました。ちやうど、そこへ、羊飼が、羊を二匹つれて、通りました。車を曳いて、こり〳〵した爺さんは、ふいと、羊と、とりかへやうと思ひました。

爺さん『羊飼さん、車と、羊とは、とりかへてくれないでせうか。』

羊飼『おやすいことです。』

爺さん『ちや、とりかへて、ください。』

羊飼は、喜んで、さつそく、とりかへました。

㊃爺さんは、やれ〳〵と思つて、羊を一匹つれて、行きました。こんどは、向ふから、大きな鞄をもつた、商人がまゐりました。

爺さん『何か、いゝものが、ありませんか。』

商人『何でもあります よ。』

爺さん『一寸見せてください。』

商人『よろしうございます。』

商人が、鞄を開いると、中には、玩具や、笛や、リボンや、袋などが、たくさんありました。爺さんは、急に、その袋がほしくなりました。

爺さん『この袋をください。かはりに、羊をあげるから。』

商人『どうもありがたう。』

㉓爺さんは、袋を腰にさけて、うれしさうに、行きました。やがて、大きな川のほとりへ、出ました。そこで、渡舟に乗つて、向岸へ、つきました。爺さんが、舟から、あがらうとしますと、

船頭『おい爺さん、渡賃をくれないか。』

爺さん『さうさう、わしは、お金を、もつてるなかつた。』

船頭『何をいつてるんだい。お金がなければ、その袋でもおいとくんだ。でないと、船からあけないぞ。』

爺さんは、をしさうに、腰から、袋をとつて、船頭に、渡して、やつと、あがりました。

㉔爺さんは、「牛と車と、とりかへて、車と、羊と、とりかへて、羊と、袋ととりかへた。だいじの〳〵袋は、川を渡つて、船頭に、とられた、とられた。」

と、いひながら、てく〳〵、歩いて行きました。これを路ばたで、聞いてゐた、牛飼は

牛飼『爺さん、そりや、ほんとうかい。』

爺さん『ほんとうさ。』

牛飼『ちや、歸つたら、お婆さんに、叱られるだらう。』

爺さん『大丈夫だよ。』

牛飼『大丈夫だつて、それで大丈夫だつたら、俺は、二の牛を、皆くれてやるよ。』

㉕爺さんは、牛飼と一しよに、自分の家へ、歸つてきました。そして、牛飼を、外に、待たしておいて、家の中へ、はひりました。

爺さん『婆さん、歸つたよ。』

婆さん『ずゐぶん、遅くなりましたね。車は買へましたか。』

爺さん『買へたが、羊と、とりかへた。』

婆さん『羊はどうしました。』

爺さん『袋と、とりかへた。』

婆さん『袋はどうしました。』

爺さん『渡し舟に乗つて、船頭にとられた。』

婆さん『でもまあ、無事に歸れてよかつたわね。』

㉖さつきから、二人の會話を、聞いてゐた牛飼は、お爺さんも、のんきだが、お婆さんも、のんきだなァ、と思つて、あきれてゐました。

すると、爺さんは、婆さんと一しよに、そこへ、出て來ました。

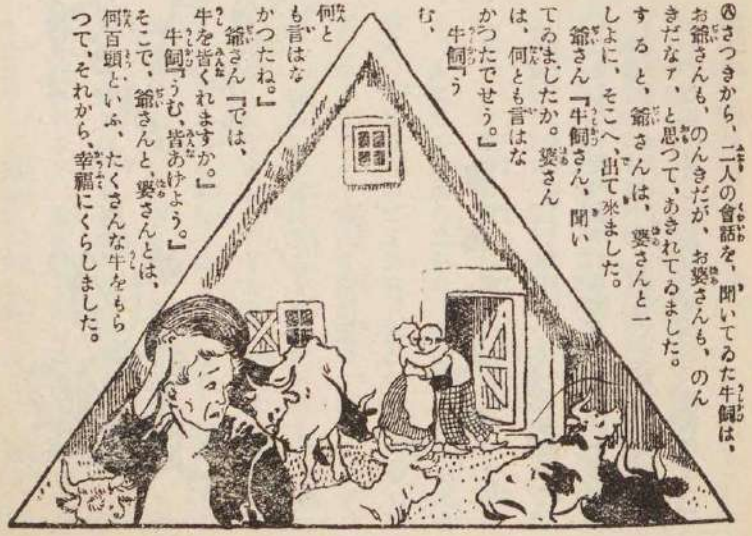
爺さん『牛飼さん、聞いてゐましたか。婆さんは、何とも言はなかつたでせう。』

牛飼『うむ、何とも言はなかつたね。』

爺さん『では、牛を皆くれますか。』

牛飼『うむ、皆あげよう。』

そこで、爺さんと、婆さんとは、何百頭といふ、たくさんな牛をもらつて、それから、幸福にくらしました。



象と旅人

齋藤佐次郎

一

印度の北には、世界中で一番高い、ヒマラヤ山といふ山があります。この山の麓には、大きな森林があつて、その中には今でも澤山の象がゐます。今から千年程前、この森林の中に、群の樣に眞白で、それは〳〵きれいな、一疋の象が住んでゐました。此の象は、身體が立派なばかりでなく、大そう心がけが善いものですから、同じ山に住んでゐる何萬といふ鳥や獸から、王樣のやうに尊ばれて居りました。

白い象は、幾年かの間、ヒマラヤ山の森林で暮してゐましたが、一度は里の方へ出て見たいと考へて、ある日の事、たつた一人で山を下りて來ました。やがて、その日も暮れ方になつたので、象はその晩を過さうと思つて、大きな森の中へ這入つて行きました。印度の國は、日中は暑くて〳〵たまりませんが、夕方からは涼しい風が吹いて、何とも言へないよい氣候になるのです。象は森の大木の下に寢ころびながら、涼しい風にふかれてをりました。すると、その時森の奥から人の泣聲が聞えて來ました。親切な象の事ですから、すぐに立上つて、聲のする方へと行きました。

二

森の中で泣いてゐたのは旅人でした。山の中で道に迷つたまゝ日が暮れて來たので、心細くて、泣いてゐたのです。もし、誰も助けなかつたら、旅人はその晩の内に、お腹がへつて死ぬか、さもなければ、恐ろしい獸物に食べられて了ふのです。

妙な足音がするので、旅人はその方を見ました。すると白い象が自分の方へやつて來ました。旅人はびつくりして、象を見詰めてゐましたが、これはきつと、自分を殺しに來たのに相違ないと思つて、あはてゝ逃出しました。象は旅人が夢中になつて、逃げるものですから、あきれて立止つてゐました。すると、旅人も象が追つて來ないので、ホッと安心した樣に立止りました。そこで、象はまた追ひかけました。すると、旅人はまた逃出しました。こんな事を一里もつゞけましたが、その内に日がすつかり暮れて、森の中は眞暗になりました。旅人は、その時になつて考へました。

『もしかすると、象は私を助けに來てくれたのかも知れない。獸物が人間を救つたといふ話は、い

くらもある。このまゝてゐたら、どうせ今夜の内に命がなくなるのだから、象が傍へ來たら一つ頼んで見よう。』と考へて旅人は、象が自分の傍へ來る迄待つてゐました。やがて、象が來ました。

『旅人さん、なぜあなたは、こんなにきれいな山の中を泣き〳〵歩くのです。何でも困ることがあつたら私に仰い。』と、象がいひました。旅人は、象の優しい言葉を聞いて、やうやく安心しました。

『象さん、私は山の中で道に迷つたのです。このまゝ夜になつたら、死んでしまふと思つて、泣いてゐたのです。』と、旅人がいひました。

『しかし、この近くに人家はありません。あなたは大そう、疲れてゐる樣ですね。私と一しよにお出でなさい。食べ物も、寢る場所も、みんな私がさがして上げます。』と、象がまたいひました。

象は靜かな森の中へ、旅人をつれて行きました。そして、果物や木の實をさがして來て、旅人に食べさせました。また、つめたい泉の水を汲んで來て、飲ませてやつたりしました。

七日の間、旅人は象の世話になつてゐました。その内に旅人は、山の中がいやになつて來ました。早く、にぎやかな市へ歸りたい、とその事ばかり考へるやうになりました。賢い象には、この事がすぐにわかりましたから、旅人にいひました。

『もし、旅人さん、私の背中にお乘んなさい。あなたが、行きたい〳〵と思つてゐる市へ連れて行つてあげますから。』

旅人は大そう喜びました。そして、象のいふ通りにしました。象は旅人を背中に乘せて、森を出ました。でこぼこした岩を越えたり、矢の樣に水の流れる谷を渡つたり、お日樣の光も射し込まないやうな、眞暗な森の中を通つたりして行きました。そして、幾日かの後、漸く印度のベナレスといふ市の近くへ來ました。そこで、象は旅人を背中から下していひました。

『この道をまつすぐにお出でなさい。すぐ市へ出られます。私はこれから先きも、あなたと一しよにゐた、あの森の中で暮してゐるつもりです。何時でも御用があつたら、また訪ねていらつしやい。』かういつて、象は旅人とわかれました。

三

象にわかれた旅人は、それからどうしたでせう。旅人は、大そう心の惡い男でした。象の背中に乘つて、旅をしてゐた間に、象のきれいな牙によく目をつけて置きました。象牙がどんなに値段の高いものかよく知つてゐましたから、どうかしてそれを取りたいと思ひました。そこで、旅人はまた來る時に道を忘れない樣にと、途中の樹や泉に目印をつけて置きました。

旅人はベナレスの市へ着くと、すぐに象牙店へ行きました。そして、

『お前さんの所では、生きた象の牙を買はないか

ね。』と、きゝました。

『それは結構な品ですな、生きた象の牙はめつたにありませんから、死んだ象のより幾層倍高いか知れません。』と、象牙店の主人がいひました。旅人は、象牙店の言葉を聞くと、大喜びに喜んで、象の住んでゐる森へ出かけて行きました。旅人は、前に目印がつけてあるので、道にまよふ事もなく、四五日の後には象のゐる森へ來ることが出來ました。象は旅人がまた訪ねて來たので、ダイヤモンドの樣な眼を光らせて、大そう喜びました。

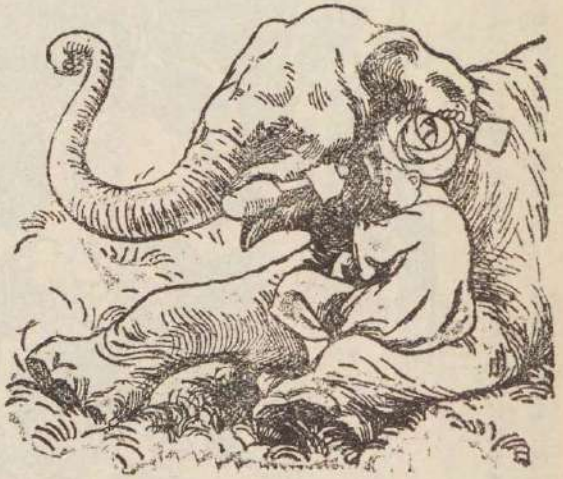
『よく、はる〳〵たづねて來てくれましたね。何か、また困る事でも出來ましたか。』と、象がきゝ

ました。心の優しい旅人は、わざと泣聲をして、今自分は、貧乏で困つてゐるから、どうぞ助けて下さいと願みました。

『旅人さん、そんなに困るなら、市へ行かずに私と一しよに、此の山の中でお暮しなさい。こゝにさへゐれば、何の心配もなく、それは〳〵安樂です。市へ行かうなどゝは、もう決して思ひなさるな。』と、象がやさしくいひました。けれども、旅人にはそんな氣は、少しもありませんでした。

『象さん、私には妻や子があります。ですから、山の中へ這入つて暮す譯には行きません。それで、あなたにお願ひがあるのです。あなたの樣に森の中で暮してゐらつしやるのには、牙のお入用がありますまい。さう思つて、私はあなたの牙を一つでたゞきに來たのです。それを賣つて、かあいそうな妻や子に、パンを買つてやりたいと思ひます。』と、旅人はそら涙を流して頼みました。旅人の言葉をきいて、象は大層氣の毒に思ひました。

『おやすい事です。そんなに困るなら、私の牙を一つ上げませう。』と、象が快くいひました。そし象は旅人がたやすく牙を切れるやうにと、首を垂れて地面に坐りました。旅人は大喜びで、すぐ樣用意して來た鋸を出して、世界にまたとない、立



派な〳〵牙を切つてしまひました。象は牙をとられても、少しも悲しみませんでした。

『私の牙を賣つたら、そのお金で、どうぞ立派な人になつて下さい。』と、象が頼みました。しかし、旅人はろくに禮もいはず、牙を持つてベナレスの市へ歸つて行きました。

四

旅人は市へ着くと、すぐに象牙店へ行きました。牙はすばらしい値段で賣れました。旅人は澤山のお金を持つたので、毎日お酒を飲んだり、御馳走を食べたり、ばくちを打つたりして暮しました。もともとおかみさんも、子供もありませんから、ありつ

たけのお金を一人で費つてしまひました。旅人はお金が無くなると、また象のことを思出しました。そして、再び象のゐる森へ出かけて行きました。象は旅人を見ると、いつもの樣に喜んで迎へました。そこで、旅人はいゝ氣になつて、

『象さん、あなたから此の間いたゞいた牙は、私の借金をはらふお金にしかなりませんでした。まことに濟みませんが、あなたの牙を、もう一つ下さいませんか、それを賣つて、飢えてゐる妻やこどもに、パンを買つてやりたいと思ひますから。』と、頼みました。象はいやな顏もしませんでした。快く大切な、もう一つの牙もやつて了ひました。旅人はそれをもらふと大急ぎで市へ賣りに行きましたが、前と同じ樣に大層なお金になりました。

しかし、怠け者の旅人のことですから、幾日かの後にはまた一文なしになりました。そこで、前の樣に山を上つて、象の處へ頼みに來ました。しかし、今度はもう滿足な牙がありませんから、今までの切り殘しのねつこの所をくれと頼みました。

『まだお金に困つてゐるのですか。』と、象が悲しさうにいひました。けれど、ひとを救ふ爲には、

どんなつらい事でも我慢しようと思つてゐる象のことですから、またも、すなほに牙を取らせました。旅人は大きなナイフで、牙のねつこをえぐり取りました。しかし、象は一とことも苦情をいひませんでした。泣聲も出しませんでした。旅人は牙をすつかりもらつてしまつたので、二度と來る必要はないと思ひました。そして、一言の禮もいはずに行つてしまひました。さて、旅人はそのまま何事もなく、市へ歸れたでせうか。

ところが、此の有樣を「森の精」が見てゐました。そして、此の事を「地の精」に話しました。

「地の精」は大そう怒りました。

『あんな、恩知らずの男を生かして置く事は出來ない。』と、「地の精」はまつかになつて怒りながら、旅人が森を出るのを待ちかまへてゐました。

やがての事旅人が森を出やうとしますと、忽ち大地が裂けました。そして、其處から火焰がぼう〳〵と燃え上りました。またゝく間に、旅人は大地の裂目に落ちて、燒殺されてしまひました。

今尙、ヒマラヤ山の森を旅して歩くと、何處からともなく、それは〳〵朗かな歌の聲が聞えます。

恩知らずの男には
やつても、やつても
足らぬ
世界中の物を
やつても、やつても
足らぬ

これは、「森の精」の子供たちが、樹の間で遊びながら歌ふ唄の聲です。「森の精」の子供たちは、誰でも、お母さんから「親切な象と恩知らずの旅人」のお話をして戴くのです。それで、みんなが森の中で遊ぶ時には、きつと此の唄を歌ふのです。（をはり）

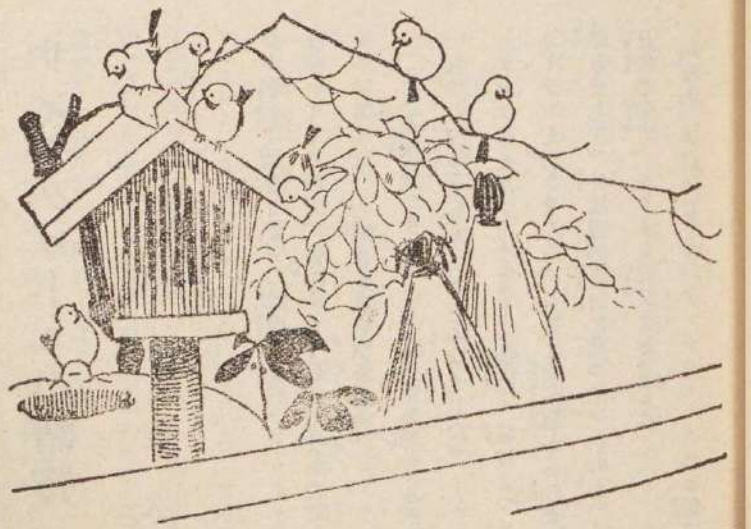
雪よ來い來い

若山牧水

雪よ來い來い坊やは寒い
寒いお手々をたたいて待に
雪よこんこと降つて來い

雪よ來い來い坊やは寒い
さむい天からまん眞白に
ちいろりちろりと降つて來い

雪よ來い來い坊やは寒い
さむいお手々は紅葉のやうだ
雪のうさぎがこさへ度い



サンタクロースの贈物

山本作次

樂しい樂しいクリスマスの前夜が、とう〳〵まゐりました。アンナさんや、マリイさんは、ストーヴの傍で、お父さんや、お母さんから、かはるがはる、面白いお話を聽かして戴きました。

その頃、アンナさんのお國では、王樣に謀叛する惡者どもがあつて、王樣は、お妃と共に、お逃げになつたといふ噂で大變な騒動がありました。

で、時々、大砲の音や、鐵砲の音が、どうん〳〵ひびいてくるので、皆びく〳〵してゐました。マリイさんは、心配さうにいひました。

『こんな晩に、サンタクロースのお爺さんが、いらつしやるでせうか。』といひました。

アンナさんは、ちよこ〳〵と窓際へ駈けよつて、カーテンを引きました。そして硝子窓から外をのぞきました。外は雪が眞白に積つて、その上、お月樣の光で、キラ〳〵輝いてゐました。

『まあ、きれいなこと、サンタクロースのお爺さんが、いらしやるやうな晩だわ。お土産を一ぱい積んだ橇を、馴鹿に曳かして、チン〳〵ベルを鳴らしながら、今にもいらつしやるやうだわ。』とアンナさんは、嬉しさうにいひました。

『いゝえお爺さんは、王樣に謀叛するやうな惡者どものゐる國へは、いらつしやらないよ。』とお父さんは、お顏をしかめながらいはれました。

『では、あたしたちは、王樣をお助けして、惡者どもを討ちませう。さうすると、サンタクロースのお爺さんは、きつと、いらつしやるわ。』とマリイさんがいひました。

そのうちに、だいぶん夜がふけました。と、俄に、表の戸を、トン〳〵たゝく音が聞えましたので、今頃何だらう、と思つて、皆顏を見あはしました。お父さんは、立つて行つて戸を開けました。戸口には、黑いきれで顏を掩うた、脊の高い人が立つてゐました。その人は、

『これはクリスマスの贈物です』といつて、お父さんの前へ、一つの包を出しました。そして、外に待たしてあつた馬に、ひらりと乘つて、雪の上をどん〳〵駈けて行きました。

お父さんが包をもつて、お室へいらつしやると、皆は不思議さうに、その包を見ました。お父さんは急いで、その包を解かれました。すると、中から、丸々ふとつた可愛い可愛い、生れて間もない赤ん坊が出て來ました。

『あゝ〳〵可愛い子だ。』といひながら、お母さんが兩手に赤ん坊を抱き上げますと、そのはずみに、ぽたんと、床の上に落ちたものがありました。急いでそれを拾つて開けて見ました。

その中には、『この子はオルガと申します。どうか大切に育てゝ下さい。』といふ意味の短い手紙が

ありました。そして、その子の養育料として、澤山のお金がはいつてゐました。

『サンタクロースのお爺さんは、やつぱりあたしたちを、お忘れにならなかつたのね』とマリイさんが嬉しさうにいひました。

赤ん坊は、それから、皆に可愛がられて、日に日に丈夫に育ちました。アンナさんや、マリイさんは、大喜びで、毎日々々、樂しく遊びました。

アンナさんのお國に、騒動が起つてから、丁度三年になりました。その年のくれ、王樣は、急に大勢の兵隊をひきいて、國へお歸りになりました。そして、王樣に謀叛した惡者どもを、お討ちになつて、もとの御位におつきになつたので、人々は大層喜びました。

そのうちにまた、クリスマスがまゐりました。その前夜、アンナさんや、マリイさんは、オルガさんと一緒に、ストーヴの傍で、お父さんや、お母さんから、面白いお話を聽かして戴きました。

だいぶん夜がふけてから、また、表の戸を、トントンたゝく音が聞えました。お父さんは行つて戸を開けました。すると、三年前の晩に見たことのある、黒いきれで顔を掩うた、脊の高い人が、戸口に立つてゐました。その人は、お父さんに、『中へはいつてもようございますか。』といつて、アンナさんたちのゐるお室へ、ずん〳〵はいつてきました。そして、いきなり、皆の前で、顔の掩をとりました。皆はびつくりしました。

それは王樣でした。王樣はやさしく、

『オルガは、余のたつた一人の娘だ。余はお前たちを信じて、このオルガを預けておいて、遠い外國へのがれて行つたのだ。ながい間、よく世話をしてくれた』と仰つて、大きくなられたオルガさんを、抱き上げて接吻なさいました。それから、今晩はもうおそいから、明日、家來どもに迎へに來ささうと、仰つて、一人でお歸りになりました。

あくる日、アンナさんのお家へ、きれいな馬車が、いく臺も着きました。そして、オルガさんと一緒に、アンナさんも、マリイさんも、お父さんも、お母さんも、皆きれいな馬車に乘つて、王樣の御殿へ參りました。そして、そこで幸福にくらすことになりました。（をはり）

痩犬とお獅子

吉田 絃二郎

朝まだ早かつたので、學校の門はしまつてゐました。

二郎はひとりでぽつねんと門の前に立つてゐました。

二郎は爲ようことなしに、門にもたれながら空を見上げました。

空は蒼い寶石か何ぞのやうにかゞやいてゐました。

門の前の栗の葉がはら〳〵と落ちて來ました。

高い空を渡り鳥がたゞ一羽寂しさうに鳴いて行きました。

寂しい鳥の影が小さな小さな、黑いぽつちりした一つの點のやうになるまで、二郎は鳥を見送つてゐました。

二郎が空ばかり見上げてゐる間に、ふと二郎の傍を人が歩いて行く音がしました。

二郎は『學校のお友だちか知ら』と思つて、道の方を見ました。

一人の男が馬を曳いて來るのでした。

男は栗の木に馬をつないで、馬の背から袋を出

して、袋のなかの麥と秣を食べさせました。

馬はおいしさうに食べました。

一疋の痩犬が黍の畑から、ひよろ〳〵と歩いて來ました。

犬は欲しさうに馬のそばに近寄つて行きました。

馬はさくさくとおいしさうな音をさせながら食べました。

犬はちよつと袋のなかをのぞいて見ては、

恐さうに馬から離れました。

馬が前脚を上げたり、尾を振つたりするたんびに痩犬はとびあがつて、逃げました。

逃げてはまた、馬のそばへ近寄つて來ました。

馬はすつかり麥と秣を食べてしまひました。

男は栗の木から馬の綱を解いて、馬をつれて行つてしまひました。

痩犬は馬が食べこぼして行つた麥や秣を、鼻の先で嗅いで見るやうにしました。

しかし、痩犬に食べられるものは何にもなかつたので、つまらなさうに顏を上げて、あたりを見まはしました。

痩犬の眼には寂しい涙がこぼれてゐるやうに思はれました。

痩犬は頭を垂れて黍畑の方へひよろひよろと歩いて行きかけました。

二郎は痩犬が可哀さうでなりませんでした。
二郎は低く口笛を吹きました。
痩犬はまたひよろ、ひよろと門の方へ歩いて來て、二郎の前に、ちよこなんと坐りました。
痩犬の寂しさうな眼が、二郎を見つめました。
二郎はカバンのなかのお握りを一つ出して痩犬にやりました。
痩犬はまたゝく間に食べてしまひました。そしてお腹がくちくなつたと見えて、二郎の袴を噛む眞似をしたりしてふざけました。

×

テン　テン、テン、テン……

森の方から寂しい太鼓の音がきこえました。
可愛い角兵衛獅子が太鼓をたゝきながら、やつて來ました。
角兵衛獅子は足袋もはかないで、片ちんばの下駄をはいてゐました。
角兵衛獅子は、泣いてゐました。
『何うしたの？』
と、二郎がたづねました。
『昨日お父ちやんが逃げちやつたので、昨夜から何にも食べないんで……』と言つて、角兵衛獅子はまた、すゝり上げて泣きました。
二郎は、またカバンのなかのお握りを出して、角兵衛獅子にやりました。

角兵衛獅子は、おいしさうにお握りを食べて、うれしさうににつこり笑ひながら、歩いて行きました。
テン、テン、テン、テン……
角兵衛獅子の寂しい太鼓の音が、しばらくきこえてゐました。
二郎のお友だちも、集まつて來ました。
山からは、お日さまが出ました。
栗の木では、頰白がしきりと啼きはじめました。
小使さんが來て、門をあけてくれたので、みんなと一緒に二郎も學校のなかへ、はいつて行きました。

×

お正午になりました。
村の工場の可愛い汽笛が鳴りました。
鐘が鳴りました。
皆はお辨當を出して、おいしさうに食べました。
二郎もカバンからお握りを出さうとしました。
しかし、カバンには一つも、お握りはのこつてゐませんでした。
『あゝ、さうだつた！』と二郎は口のなかで、言ひました。
今朝逢つた痩犬や、寂しい角兵衛獅子の姿が、二郎の心にうかんで來ました。
二郎は、うれしさうにふざけて歸つて行つた痩犬や、につこり笑つてわかれて行つた角兵衛獅子の顏を思ひ出しました。
二郎は、うれしいやうな、ひとりでに笑つて見たいやうな心持になりました。
テン、テン、テン、テン……
角兵衛獅子の太鼓の音が二郎の耳には、いつまでも響いて來るやうに思はれました。
二郎は、ちつともひもじいとは、思ひませんでした。
二郎は、誰よりも幸福さうな顏をして、運動場に出かけて行きました。（をはり）

太陽をとつた話

橘　逸雄

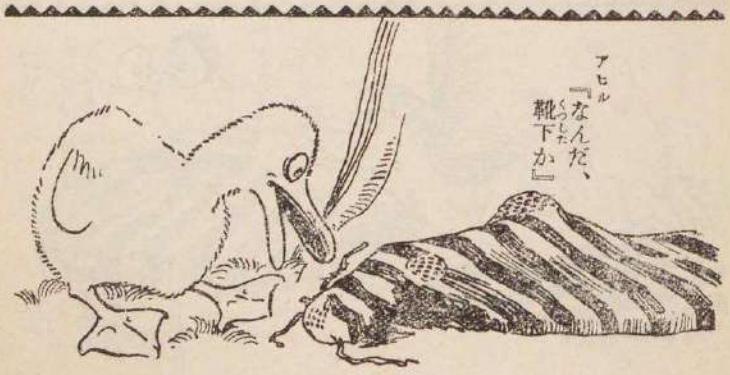
アメリカが、まだ今日のやうに開けない、ずつと、ずつと昔のお話です。そのじぶんは、今日とちがつて、黒ん坊の土人ばかり住んでをりました。そのころ、ある山おくの谷あひに、土人が大勢集まつて村の様に住つてゐる一つの部落がありました。その部落は、晝も夜もまつくらで、その上、大へん寒くつて、それは〳〵、不愉快なところでありました。それでも、そこに住んでゐる人々は、もうなれてしまつて、そんなに不愉快にも思ひませんでした。その部落に一人の若者が

アヒル『おやッ蛇だ』

ありました。その若者ばかりは、自分の部落が、不愉快で、不愉快でたまりませんでした。どうかして、もつとあかるい、あつたかい、そして氣もちのよい所を、見つけたいものだと思つて、若者は毎日々々山の中をあちら、こちら、さがしてをりました。

ところが、ある日、ひよつくりと、山の麓に出ました。そこにもやつぱり、土人の住つてゐる部落がありました。その部落は、あかるいあつたかい、そして大そう氣もちのよいところでした。若者はふしぎに思つて、その部落の中へ、ずんずんはいつて行きました。すると、見るもの、聞くもの、ことごとく、ふしぎなものばかりです。若者はあたまの中がひつくりかへるほど、おどろきました。なかでも、一ばん若者をおどろかしたものは、「火」といふものです。それは御馳走をこしらへたり、あかりをつけたりする大そう便利なものであつたからです。しかし、もつと、もつと若者をおどろかしたものは、その火から造つた、「太陽」といふものでありました。この部落が、あかるくつてそして大そう氣もちのよいのは、太陽のおかげであるといふことを聞いて、若者は、急に太陽がほしくなりました。

若者は、いそいで自分の部落へかへりました。そして、部落の人達



アヒル『なんだ、靴下か』

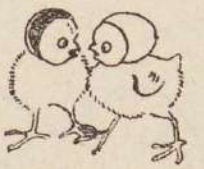
の頭になつてゐる酋長に會つて、自分の見てきた事、聞いてきた事を一つ一つ話しました。中でも、太陽については、一段と力をこめて、

「酋長樣、私は、「太陽」といふ不思議なものを、見て參りました。もし太陽といふものがありましたら、この部落は明るくつて、あつたかくつて、それは〳〵心地よい處となります。」と言つて、若者は酋長に太陽の説明を熱心にしました。

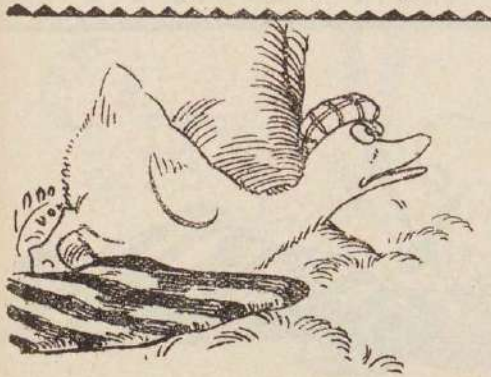
けれど、太陽を見たことのない酋長には、それがどんなものだか、一寸も分りませんでしたから、太陽を買つて來いとも、貰つて來いとも、言ひませんでした。

しかし、若ものは、太陽がほしくて、ほしくて、たまらないので、また、麓の部落へ出かけて行きました。行つて見ると、ます〳〵ほしくなるばかりですから、また、自分の部落へかへつて來て、酋長に會ひました。そして再び、太陽の必要を、熱心に話しました。酋長も、若者があまり熱心なので、とう〳〵若者の言葉に從つて、

「そんなに欲しいものなら、行つて買つて來るがよい」と言ひました。若者は、酋長の言葉を聞くと、大喜びで、飛ぶやうに麓の部落へ行きました。若者は、都落の人々に會ふたんびに、



アヒル『向ふから ヒヨッ子が 來た、おどかしてやらう、』



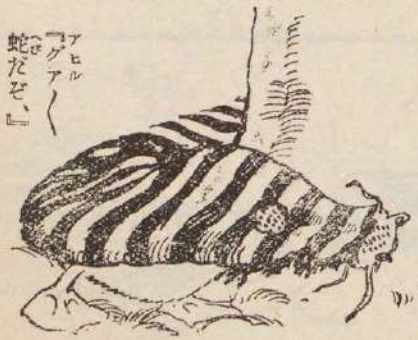
「太陽を賣つてくれませんか。」

「太陽を買つてくれませんか。」とたのんで見ました。けれど、誰一人まじめに相手になつて、賣らうと言つてくれる者がありませんでした。若者はがつかりして、すご〳〵、自分の部落へかへつて來ました。

それから後も、若者はどうかして、太陽を手に入れたいと思つて、色々考へて見ました。けれど、一つもよい方法が見つかりませんでした。そこで、とう〳〵「とつて來てやらう」と決心しました。さうは決心したものの、太陽の番人は、一日中たつた二三分しか眠りません。

「ヒヤー」

「ヒヤー」



アヒル『グア〳〵 蛇だぞ、』

そして、その間でも、片眠を開けてゐるので、なか〳〵すきがないのです。ですから果して巧くとつて來られるかどうか分りませんでしたこのやうに、若者はいろ〳〵と考へてゐましたが、そのうちに、よい考がうかんだと見えて、太陽をとりに出かけました。

若者が、麓の部落へつきますと、ちやうど、部落の人々はみんな、狩獵に出て留守でした。そこで、若者はにはかに、魔術をつかつて、樫の木になりました。そして、人々の通りさうな路ばたに、横つてをりました。ちやうどそこへ、若者の待ちかまへてゐた、太陽の番人が

やつて來ました。で、樫の木になつてゐた若者は、喜んでをりますと番人は樫の木を見つけて、「これはよい薪になる」と言ひながら、ひろつて歸りました。番人は家へ歸ると、さつそく、ひろつて歸つた樫の木を折つて火の中へくべました。

若者は、火の中で、ぼう〳〵もえながら、一生けんめいになつて、熱いのをがまんしながら、番人のすきをうかがつてをりました。すると、番人はうと〳〵眠りかけました。若者は、「こゝだ」と思つて、急に火の中から、とび上りました。そして、太陽をこつそりとつて、自分の部落へ歸りました。

若者は、太陽を自分の部落の人々に見せて、喜ばしてやらうと思つて、とくいになつて歸りました。

しかし、部落の人々は、あんまり急に明るくなつたので、みんな、「眼がいたい、眼がいたい」といつて逃げまはりました。そこで、若者はおどろいて、これではいかぬと思ひ、いろ〳〵考へた末、西の空に孔をあけて、太陽をおとしました。しかしおとしただけではいけないので、また、東の空に孔をあけて、太陽の出るやうにしました。

それから後、この部落は、ちやうどよい工合にあかるく、あつたかくなつたので、人々は大そう愉快にくらすやうになりました。（をはり）

親鳥子鳥（つゞき）

徳永壽美子

『小鳥君お早う。』と　秀雄さんが、聲を掛けました。

すると巣の中から、ゆふべの母鳥が、ひよつこりと頭を出して、可愛い聲でいひました。

『あゝ坊ちやまですか。お早うございます。』

『どんなの子供は。』

『どうも好くございませんでね。』と母鳥は心配さうに言つて首を傾げました。

『ぢやあ僕の家へ連れて來たまへ。僕が一生懸命に、手當をして上げるから。』

『まあ〳〵御親切樣に。』

母鳥はかう云つて、嬉しさうに細い尾をぴよんぴよん振りました。

そこで秀雄さんは、する〳〵と椎の木に登つて巣をとりはづしました。そして親子の鳥が入つたまゝ、そつとお家へ持ち込みました。

見ると小さな子供は、毛もすつかり拔けて了ひ骨ばかりのやうにやせこけて、ぐつたりと寢て居りました。秀雄さんは思はず、

『ほう、これは大變だ。』と言ひました。が、母鳥が目に涙を一杯溜めて、悲しさうにしてゐるのを見ると、直ぐにまた『だけどきつと治るよ、僕が治して見せる。心配しないで、僕に任せて置きたまへ』と元氣よく云ひ直しました。

それから、秀雄さんは大きな鳥籠へ、柔かい藁を敷いて、親子の鳥を移しました。そして茶の間の縁側の隅に置いて、毎日〳〵熱心に世話をしました。實丹をのませたり、牛乳をやつたり、茹卵の黄味をくづしてやつたり、お菜を擂りつぶしてやつたり、また溫かい藥湯にも入れてやりました。

かうして、十日ばかりたつうちに、子供はすつかり、丈夫になつて來ました。ふく〳〵と太つて毛も短く生え揃ひました。細い細い足で、とちとちと歩いたりしました。母鳥はそれを眺めては嬉し泣きに泣いて、小さな涙の粒を、ぽろぽろとこぼして居りました。

丁度その頃から、秀雄さんのお母樣の御病氣は、ずつと惡くなつて、毎晩苦しまれました。ある晩のこと、ことにひどい熱が出て、大變に苦しがつてゐらつしやいましたが秀雄さんは晝間のうち、牛乳もあるお醫

者様の處まで、二度までもお藥とりに行つたりしましたので、すつかり疲れて、何も知らずに眠つてゐました。

すると籠の中で、うと〳〵としてゐた親鳥は、そつと起き上つて、病室へ飛んで行きました。そして熱で火のやうになつてゐる、お母様のまはりを、羽であふぎながら、ぐる〳〵と廻りました。それからごく小さな澄んだ聲で、色々な珍らしい歌をうたひました。そのうちにお母様が、

『あゝ、なんていふ好い心持になつたのだらう。』

とほつとしたやうに、ひとりごとを云つて、すやすやと安らかに眠つてお了ひになつたので、小鳥は何とも云へない嬉しさうな顔をしました。そして、その一晩中枕元にゐて靜かに歌をうたひ乍ら、羽であふいで居りましたが、夜が明けさうになると、急いで籠へ歸つてしまひました。

小鳥はかうして幾晩も〳〵、看護に夜をあかして居りました。

お母様は、毎晩々々夢の中で、身も心も洗はれるやうな、涼しい風に吹かれました。また樂しく晴れ晴れした、歌の聲を聞きました。それを、いかにも不思議な事に思つて、ゐらつしやいましたが、御病氣は一日まして、ずん〳〵よくなつてゆくのでした。

處がある晩の事でした。小鳥はいつものやうに羽であふぎながら、好い聲で歌をうたつてゐましたが、自分で自分の歌の面白さにつり込まれました。そして、夢中になつてゐた間に、いつか夜が明けて了ひました。そして朝日の爽かな光りが、お母様の安らかな寢顔の上に、眞直にさしました。小鳥は我知らず透通るやうな清い聲で、高く啼きました。

『おてんとう様、おてんとう様。どうぞ親切な坊ちやまの、大事なお母様の御病氣を、今日かぎり治してお上げ下さいまし。』

この時、お母様はぽつかり目を覺まされました。そして樂しさうなお顔で、床の上に勢よく起き上られました。それを見ると、すぐそばの床で、目を覺まして飛び起きた秀雄さんは、吃驚して、大きな聲で云ひました。

『あらお母様、お起きになれるの。』

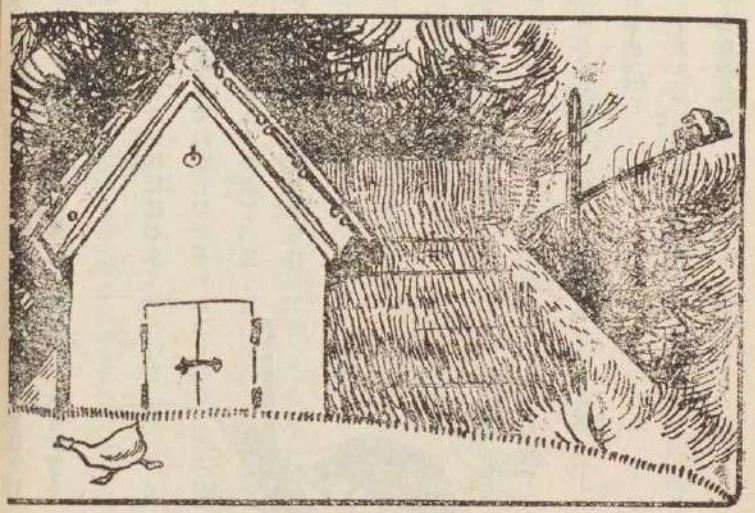
すると お母様は優しくほほ笑みながら、

『秀雄ちやん、お母さんはもうすつかり、よくなつたの、もう今日から起きますよ。あなたには永い間、隨分心配をかけましたねえ、でもよく看護してくれました。ありがたう。』

から云つて、秀雄さんの手をしつかりとお握りになりました。

『嬉しいな、嬉しいな。お母さんが治つて嬉しいな。』

秀雄さんはかう歌のやうにうたひながら、ぴよんぴよんはね廻りました。茶の間では、親子の小鳥が聲を揃へて、さも樂しさうにピッピ〳〵と美い聲でさへずり交してゐました。（をはり）



冬の日

野口雨情

聾くて、皆に可愛がられた文ちゃんは、去年の十二月母さんにわかれ、今は信濃の國にをります今年七歳の少女です

ここの屋敷は
空屋敷
文ちゃん生れた茨城の
元の屋敷も
空屋敷

ここの畑は
桐畑
文ちゃん生れた茨城の
脊戸の畑も
桐畑

ここの姉さん
日和下駄
文ちゃん生れた茨城の

茶屋の娘も
日和下駄

ここの柱は
木の柱
文ちゃん生れた茨城の
元の御門も
木の柱

お月様のおはなし

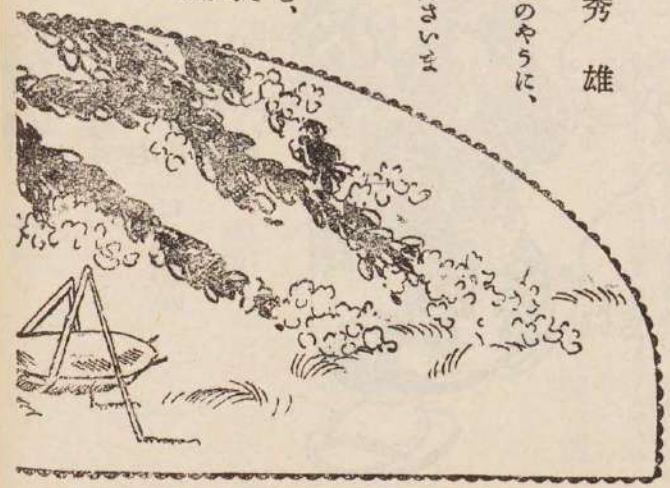
長田秀雄

皆さん、此頃はお月さまが、丁度、キユウピイさんの眼のやうに、まん丸に照りかゞやいてゐらつしやいますね。

ある晩、お月さまがわたくしに、こんなお話をしてくださいました。

わたしは、雲さへなければ、毎晩かうやつて、ぢいつと、地球の上を見てゐますから、いろんな面白い事や怖しい事や、悲しい事を見ます。汝さんに、一つ、その内で、一番面白かつたお話をしませうね。

やはり今夜のやうな晴れた美くしい晩でした。わたしは何時もの通りキチンとこの森の上へ顔を出しました。萩の花がさきこぼれて、その上に、露がキラキラ光つて



ゐる廣い庭が、すぐ、わたしの下に見えました。こほろぎが悲しさうな聲で、長い鬚を顫はして一生懸命に唄を唄つてゐました。

まあ、何處で、あんなに唄つてゐるんだらう、と、かう思つて、わたしは、諸方搜しました。こほろぎは、その萩の根元のところに、おとなしく坐つて唄をうたつてゐたのです。

「おい、何だつて、そんなにメソメソ泣いてばかりゐやがるんだい。喧ましいぢやないか。」と云ふ憎てらしい聲がきこえたので、わたしは、吃驚して見ますと、芝生の内から、大きなかまきりが、一疋、ノソノソ出て來ました。

自分の身體に似合はないやうな、大きな斧を持つてゐます。こほろぎは、厭な奴が出てきたと思ひましたが、それでも柔しく

「だつて淋しくて仕樣がないんだもの。」と、靜かに答へました。

「淋しい。弱蟲だなあ。」と云つて、かまきりは、大きな聲で笑ひました。そして

「君は一體意氣地がなさすぎるよ。だから、そんなに淋しいんだよ。俺をご覽。

一度も淋しいなんて考へた事はありやしない。かうやつて、諸方歩き廻つて、癪にさはる奴だの、食物になりさうな奴だのが見付かると、すぐこの斧で切殺してムシャムシャ喰べてやる。だから張合があつて面白くて耐らない。」と云ひました。そして恐ろして斧を振廻してみせました。

「だつて、いくら甘味いつたつて、罪も何もない者を殺して喰べるのは、いい事ぢやないぢやないか。」とこほろぎが、不平な顔付で答へました。すると、

「今時、そんな馬鹿馬鹿しい遠慮をしてゐた日には、俺たちは自分が飢死をしなければならない。かまふもんか。何でも喰べてやるとも。」かう云ひながら、かまきりは、ふと心の内で考へました。

「このこほろぎは、喰べたらきつと甘味いぞ。今夜は、まだ何にもたべないからお腹が空いてゐる。一つ欺して殺してやらう。」

かまきりの眼は恐ろしく光つてきました。それを見たこほろぎは、「此奴は餘程惡い奴だ。要心しないといけない。」と思ひました。

かまきりは、急にニコニコして、

「どうだい。大へんに月がいいぢやないか。君はそんな處に引込んでばかりゐるから、淋しくなつたりなんかするんだよ。こつちに出て來ないか。一しよに散歩でもしやうぢやないか。」と云ひました。

「有難う。折角だけれども、まあ、僕は御免をかうむらう。またこの次に一しよに散歩しやうよ。」と、何事もないやうにこほろぎは斷りました。

「これはいけない。」と、かまきりは腹の内で考へました。そして、自分だけで、庭の眞中の方へ這つて行つて、遠くから

「君、此處に、君の好きな草の露の甘味いのがあるぜ、一寸來て見たまへ。」とさそひました。

こほろぎは草の露が大好でした。丁度氷水のやうな冷たい甘い草の露を一滴嘗める時の事を考へると、もう耐らなくなりました。

「いくらかまきりだつて、まさか友だちの俺を殺して喰べもしまい。出て行つて、一つ御馳走に有りつかうかな。」と、可哀さうなこほろぎは考へるやうになりました。そしてとうとうおびき出されました。

こほろぎが、何の氣もなしに、庭の眞中の芝生の方へ行きますと、芝草の蔭でかまきりが大きな眼を光らせて、斧を振上げて待伏せしてゐました。驚いてすくんでしまつたこほろぎは

「かまきりさん。君は僕を殺すのですか。友達の僕を。」と、訊きました。

「あたりまへよ。友だちだらうが何だらうが、腹が空いた時には容赦が出來るもんか。殺して喰べるのだ。」と、かまきりは憎てらしい聲で云ひました。

もう、どうする事も出來ません。武器を持つてゐないこほろぎは、たゞ、ぢいつとしてゐて、かまきりに殺されるばかりです。

そこでこほろぎは、悲しい聲で細々と唄をうたひだしました。

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは、弱いこほろぎよ、
斧もなければ、牙もない。

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
爪も鋏も持ちませぬ。

かまきりは唄を訊いても少しも感じませんでし

た。そして

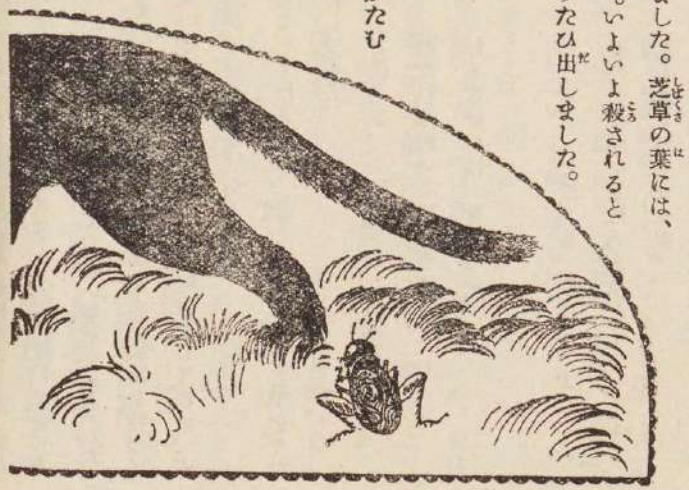
「さあ、覺悟しろ。」と云つて、じりじりと傍へ寄つて來ました。芝草の葉には、透通るやうな露が、お月さまの光をうけて輝いてゐました。いよいよ殺されると云ふのでこほろぎは、血をしぼるやうな聲で、最後の唄をうたひ出しました。

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
何時も淋しく泣くばかり。

庭中の蟲は、この美くしい悲しいこほろぎの唄に耳をかたむけました。そして、こほろぎを可哀さうだと思ひました。

丁度、その時、お庭の芝生に眠つてゐた玉と云ふ黑猫が眼をさましました。そしてお月さまの前で、長い長い伸びをしました。暗やみで物を見分ける事の出來る玉は、欠伸をしながら、斧をふり上げてゐるかまきりを見付けました。そして、こほろぎの悲しい唄をきゝました。

玉は忽ちかまきりに躍りかゝりました。そしてかまきりを口にくはへたまゝ、ノツノツと、垣根から出て行つてしまひました。



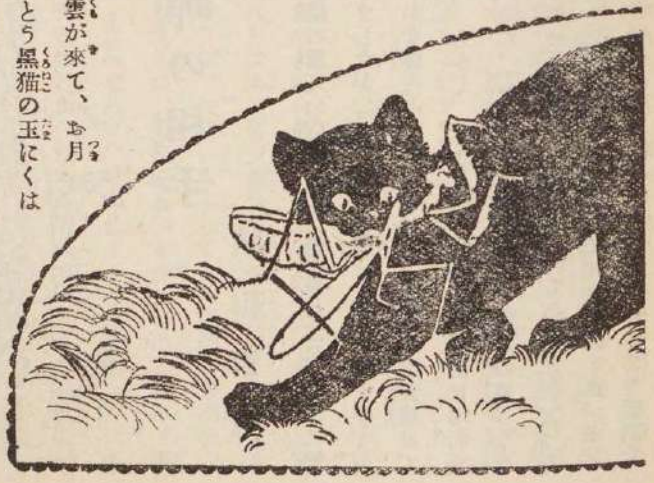
不思議に命を救かつたこほろぎは、暫くぼんやりしてゐましたが、また奮の萩の根元の處へ這つて歸りました。そして、嬉しさうに、かう云つて唄ひました。

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
唄をうたつて、日をくらす。

こほろぎ、こほろぎ、こほろぎよ、
わたしは弱いこほろぎよ、
友をたづねて、泣きまする。

お月さまが、かう話しておしまひなさると、生憎大きな雲が來て、お月さまをかくしてしまひました。それで、わたくしは、とうとう黑猫の玉にくはへられた、かまきりの行衛をうかがふ事が出來ませんでした。

（をはり）



喧嘩の相手

横山壽篤

鞋屋の藤八の店は、お天氣が續きさへすれば、繁昌しましたが、雨が降ると暇でした。もと〳〵氣みぢかな藤八のことですから、雨降りは大嫌ひでした。しかし、天へ、さう云つて行く譯にも行かないので、ぶつ〳〵云ひながら、旅人の重さうな足を覽めては、ためいきをついてゐるのでした。ある日のこと、藤八の嫌ひな雨が、ピショピショと降つてゐました。藤八はいつものやうに、天道さんを恨みながら、すぱりすぱりと煙草を吹かしてゐましたが、ひよいと何か考へついたやうに、煙管で煙草盆の縁をポンと叩きました。

一

むかし、江戸の品川に鞋屋の藤八と云ふ氣みぢかな男がありました。藤八は親もなければ子もありません、たゞ一人暮しでした。尤も弟が一人ありましたが、それは大阪に住んでゐて、傘屋をしてゐると云ふことでした。兄弟は子供の時分れたきり、三十年餘りも逢つたことがないのでした。

『さうだ弟は傘屋を渡世にしてゐると云ふことだから、こんな雨の日には、きつと店が繁昌するであらう。つまり私の店が暇な時に、弟の店は反對に繁昌するのだ、そして又、私の店が繁昌する天氣の日には、弟の店は暇なのだ』と藤八は一人で感心してゐました。

『そこでだ、私と弟と一緒になつて、店を出したら、どんなものだらう、一年三百六十五日、毎日毎日繁昌するにちがひない。これは旨いことを考へた、弟とも長く逢はぬから、あれも私に逢ひたいと思うてをるであらう。兎に角一度逢つて、一緒に店を出すことを相談して見よう』と、かう藤八は思ひました。さあ、さうなると、氣短かな藤八のことですから、もう立つても、ゐてもをられません。店をすつかり片づけてゐる中に、雨も幸ひ歇みましたので、家の戸を皆閉めて、お隣へ留守を頼んで、旅仕度もそこ〳〵に、鞋を腰に十足ばかりぶら下げて、大阪をさして下りました。

二

大阪の天滿に住んでゐる傘屋の茂右衛門は、兄の藤八とは違つて、至つて氣長な男でした。兄と同じやうに、矢張一人暮しでした。茂右衛門は、いつも氣長に、雨の降るのを待つてゐました。雨が降りさへすれば、傘がどん〳〵賣れました。あるお天氣の日に、茂右衛門は考へました。『江戸の兄は鞋屋をしてゐると云ふことだから、こんなお天氣の日には繁昌するだらうが、私の店の繁昌する雨の日には、兄の店は駄目だらうなあ。それで

は兄と私と、一緒に店を開いたらどうなるのだ。さうだ、年が年中暇なしだ、不景氣知らずだ、繁昌つゞきだ。これは面白い、早速兄と相談して、店を一緒にしたいが、まてよ、兄は江戸の品川、私はこの大阪の天滿だ、急には話も出來ぬ。併し暫く兄の顏も見ないから、逢つて見たくもなつた、氣長に是れから江戸まで相談に出かけるとしよう』と弟の傘屋茂右衞門は、店を閉めきつて、近所の人に留守を賴んで、荷物と云つたら商賣ものの傘一本、紐で兩端を括つたのを、袈裟掛けにして、大坂を立ちました。

氣長な茂右衞門のことですから、幾日も〳〵掛つて、やつと、「御油の宿」に着きました。そして其處の茶店に腰を掛けて疲れた足を撫りながら、茶店のお婆さんが汲んでくれたお茶を飲んでゐる處へ、ひよつくり

『御免なされや』と挨拶して、威勢よく茶店に飛び込んだ男がありました。

『さあ、お掛けなさいませ、お疲れで御座いませう』と茶店のお婆さんは懇ろにいつて、お茶を汲んで出しました。すると其男は、

『有り難う、いやもう、江戸から此處までは遠いことだ』と、云つて長い旅の出來ごとを思ひ出しながら、茂右衞門の掛けてゐる床几の一方に腰をおろしました。

三

茂右衞門はその旅人が、鞋を腰に二三足も下げてゐるので、江戸の兄のことを思ひ出して見て、言葉をかけて見たいやうな氣がしてゐる處へ、この人が江戸から來たときいて、何となく懷しくなつて來ましたので、

『へえ、あなた樣は、江戸からおいでなされたか、それは〳〵』と、兄の住んでゐる品川邊のことを、尋ねて見ようかとも思ひました。すると其男は、

『お前さんは上方だな、ふん成程、大坂から來たと仰るか、して、大阪から此處まで幾里ありますかな』と相手の返事も待たずに、氣短かに云ふのでした。茂右衞門はゆつくりした言葉の調子で、

『さて、何里ありますかなあ』と頸を傾けました。

『何里ありますかなあは驚いた。自分で歩いて來た道のりが分らぬとは、お前さんは餘程のんきなお人だ。道理で上方者か。贅六だな、はゝゝ』と如何にも人を馬鹿にしたやうな口調で云ひました。

茂右衞門は

『贅六……』と聞きかへすやうに云ひました。

『贅六と云つたがお氣に觸つたか。私にも贅六の弟が一人あるが、お前ほどのんき者でもあるまいよ』と云つたので、茂右衞門は

『お前さまに贅六の弟があるなら、私にも江戸兒の兄が一人ある、しかしお前さんのやうに、無茶苦茶なことは申しません。』と云ひました。

『何をッ』と云ひざま、其男は、飲み掛けの茶碗のお茶を、茂右衞門の顏にヂャブリと引つかけま

した。茂右衛門は驚いて、ついと床几から離れますと、その拍子に、床几の一方が浮いたので、其男は床几から轉んで、したゝか尻餅をつきました。

二人は暫く默つて睨み合つてゐましたが、氣みぢかさうなその男は、

『斯うしてはをられぬ、わしは是から大坂の弟を訪ねて行く處だ』と出掛ける仕度をしました。茂右衛門も

『一日も早く兄に逢ひたいものだ、あゝ馬鹿馬鹿しい』とつぶやいて、茂右衛門は東へ、その男は西へ立ち別れました。

四

鞋屋の藤八は漸く大阪の天滿にたどり着きました。弟の住居を尋ねあてゝ行つて見ると、戸が閉つてゐました。お隣りできいて見ると、茂右衛門は江戸の兄の處に行くと云つて、出て行つたのだと分りましたので、藤八は休みもせず直ぐに江戸をさして歸りかけました。

兄を尋ねて江戸に上つた茂右衛門も、兄の家に來て見ると留守になつてゐるので、近所できいて見ると、弟の内に行くと云つて大阪に立つたと云ふことなので、さすが氣長の茂右衛門も、直ぐに又、大坂をさして歸り掛けました。

藤八は「御油の宿」まで來て俄雨に逢ひました。下りの時休んだ、茶店へ寄つて、休息しながら、此間上方者と喧嘩をしたことなど思つてゐました。その内に雨は駄んで、雲間からは麗かな日がさしました。と其處へ、今藤八が思出してゐた喧嘩の相手が、雨に濡れた傘を提げて這入つて來ました。二人は顔を見合してお互ひにふふんーと云つたやうな顔付をして、ニコリともしませんでした。

茂右衛門は、軒端に、も一度出て、ひよいとお日さまを仰いで見ました。そして持つてゐた傘を擴げて、日に乾しました。傘には墨黑々と大きな字で、丸の中へ「大坂」と書いた片方に、「傘屋茂右衛門」としてありました。

ぢつとそれを見てゐた藤八は、びつくりして手から茶碗を取り落しました。そして

『茂右衛門、お前は茂右衛門か。』と藤八は大きな聲で云ひました。茂右衛門はびつくりしました。又喧嘩でも吹きかけるのではあるまいかと思つたからです。

『私は、お前の兄だ、藤八だ、江戸の藤八だ。』と藤八は餘りの嬉しさに、せき込んで云ひました。

茂右衛門、せき込んで、

『えゝ、お前さんが、あの藤八兄さんか』

『おさうだ、さうだ、茂右衛。よう、無事でゐてくれたの。』

『おゝ、兄さんか。』と云つて、二人は手を取り合つて嬉し泣きに泣きました。

それから、二人は江戸へ一緒に上つて、兄弟二人で傘と履物店を出しましたので、店は毎日々々大繁昌をして兄弟仲よく樂しい月日を送りました。(をはり)

黒姫（つゞき）

齋藤佐次郎

一

黒姫は、お城の外へ出て見たくて堪りませんでしたから、蛇のいふ通りになりました。しかし、お城の御門の處まで來た時、ふゝとお母樣が仰つたお言葉を思出しました。「女神のおいひつけだから十六歳のお誕生日までは、決してお城の外へ出てはいけません」とお母樣は何時も仰つたのでした。

そこで、黒姫は蛇にたづねました。

『蛇さん、私はあのきれいな御殿へ行つたら、きつと眞白なお姫樣になれますか。』

『えゝ〳〵、あなたはお月樣のやうに、きれいな、きれいな、お姫樣になれますよ。』と蛇が答へました。

た。そこで、黒姫は大そう安心して、お城の御門を出ました。黒姫がお城の外へ出ると、お城の御門がひとりでに締つてしまひました。そして、突然にゴーッと物凄い音がしました。

黒姫はびつくりして、お城の方をふり返つて見ました。ところが、お城はもう無くなつてゐました。たゞ壞れた跡だけが、山のやうになつて殘つてゐました。黒姫は泣きさうな顏をして、お城の跡を眺めてゐました。すると、蛇が又言ひました。

『黒姫さん、あなたは、未だそんな處で考へ込んでゐるのですか。あんなお城はどうなつても、いゝぢやありませんか。それよりか早くあの樂しい御殿へ行きませう。』

かういつて、蛇は黒姫をいそがせました。

やがて、大きな〳〵御殿の前まで來ました。黒姫が蛇にさそはれて、樹の上から遠くの方に眺めたのは、この御殿でした。ところが、傍へ來て見ると、何といふ變り方でせう。あたりは一面の草原でした。廣い御殿や、高い塔は、幾年にも人の入つた事がないと見えて、ひどく荒れてゐました。壁は落ち、家根は傾いて、それは〳〵ひどい、あばら家でした。黒姫が遠くから、きれいな花のやうに思つたのは、そこに茫々と生えてゐる青草でした。樂しい音樂の音のやうに聞えたのは、野を吹く風でした。蛇は門の前に立つて、ピーッと口笛を吹きました。すると忽ち、黒い大きな御門の扉があいて、中から大きな黒い熊が出て來ました。

『黒姫さん、ようこそお出でになりました。先程からお待ち申して居りました。』

かういつて、熊がお辭儀をしました。すると小さな熊が、幾疋も、幾疋も、後から後から出て來て、みんな黒姫の前まで來ると、丁寧にお辭儀をしま

した。黒姫はびつくりして、

『蛇さん、あなたはこんなおそろしい御殿へ私をつれて來たのですか。私はこんな處にゐるのは、いやです、いやです。』黒姫は聲を立てゝ泣きながら、逃げようとしました。すると、熊がわアッとかけ寄つて、黒姫をつかまへました。そして、御殿の眞暗な一室へ押しこめてしまひました。

二

黒姫は、眞暗な、寒いお部屋の中で、何時までも、何時までも、泣いてゐました。しまひには、涙がつきて、泣く事も出來なくなりました。その時、お月樣の光が、窓から射込んで來ました。

お月樣が黒姫にいひました。

『黒姫さん、この窓から早くお逃げなさい。』

黒姫はお月樣のお言葉を聞いて、大層よろこびました。そして、直ぐ窓をとび越えて、外へ出ました。外は草ぼう〳〵とした御殿のお庭でした。黒姫はお庭を通つて、逃げましたが、間もなく、御門の處へ出ました。そこで、ありつたけの力を出して、門の扉を押しました。すると、扉は物凄い音を立てゝ開きました。この物音をきゝつけて、熊が、追ひかけて來ました。

黒姫は、澤山の熊が集つて來るのを見て、ふるへてゐました。その時、ふゝと椋鳥のことを思出しました。助けてもらふのは、この時だと思つて、黒姫は大聲にいひました。

『森の椋鳥さん、どうぞ私を助けて下さいまし。どうぞ、助けて下さいまし。』かういつたかと思ふと、黒姫は忽ち鳥になつて、森の方へ飛んで行きました。熊は急に黒姫の姿が見えなくなつたので、大騒ぎをしました。その内に何處かへ行つてしまひました。

そこで、黒姫はまた元の姿にかへりました。

黒姫は、蛇に殘をつかれたのが、悲しくて、泣き泣き森の中を歩きました。するとその時、また熊の近づいて來る足音が聞えました。黒姫は足音をきいて、ふるへて居りましたが、今度は白バラの

事を思出しましたから、『白バラさん、白バラさん、私を助けて下さいまし。』と、泣きながらいひました。すると、黒姫は忽ちバラになりました。熊たちは、もう一と足といふ處で、黒姫の姿が消えて、たゞ一輪の白バラが咲いてゐるばかりなので、まごついて居りましたが、あきらめて森の向ふへ行つてしまひました。

三

黒姫は、一生けんめいに森の中を逃げました。しかし、歩いても〳〵森がつきませんでした。その内に大きな洞穴の前へ出ました。そこまで來た時には、疲れ切つて、一と歩も歩けませんでした。黒姫は仕方なく地面に坐つて泣いてゐました。すると泣き聲をきゝつけて、洞穴の中から羊が出て來ました。『そこで泣いてゐるのは、どなたです。』と、羊がきゝました。黒姫は羊のやさしい聲を聞いて、大層安心しました。そこで、『どうぞ今夜一と晩泊めて下さい。』と、頼みました。

『お安い事です。さア〳〵お入りなさい。』といつて、羊は親切に黒姫を洞穴の中へ入れてくれました

た。しかし、黒姫は蛇に嘘をつかれた事が悲しいので、まだ泣いてゐました。そこで、羊が『お姫さま、こわい事はございません。私は少しもあなたに惡い事をいたしませんから。』と、いひました。けれども、黒姫は矢張り泣いてゐました。羊は不思議さうな顔付をして、

『お姫さま、何故あなたは、そんなにお泣きになるのです。』と、再び尋ねました。羊があんまり幾度もきくものですから、黒姫はその日の出來事をすつかり話しました。

『私は蛇に誘はれ、女神のお言葉に背いて、お城の外へ出ました。ですからその罰として、これから一生がい、眞黒なお姫様で終らなければなりません。それが悲しくつて、悲しくつて、泣いてゐるのです。』と、黒姫が話ました。羊は氣の毒でたまらない樣に、目に涙を一ぱいためていひました。

『まア、何といふお氣の毒な事でせう。しかし、あなたばかりではございません。私も矢張り、あなたの樣にあはれな身の上です。』自分の事を話して黒姫を慰めやうと思つたのか、今度は羊が自分のお話をしました。羊はもと、ある立派な國の王子であつたのです。王樣が大そうお歳をとつてゐらしつたので、間もなく王樣の位につく事になつてゐました。所が、臣下の内に、大そう惡い男があつて、王樣の位を自分でとらうと考へ、魔法使をたのんで來て、王子に魔法をかけました。それでその王子が、羊になつてしまつたのでした。

此のお話をきいて、黒姫は自分の事はすつかり忘れ、羊が可哀そうだと言つて、泣きました。羊は羊で、自分の事は忘れて、黒姫が可哀そうだといつて、泣きました。二人の涙がポタ〳〵と地面へ落ちました。

すると、不思議にも、落ちた涙が寶石のやうに、キラ〳〵と光りました。光は次第に增して來て洞穴の中が、隅から隅まで輝きました。そして、洞穴の中の樣子がすつかり變つてしまひました。今まで汚い所だとばかり思つてゐたのに、其處は立派な、立派な御殿のお部屋であつたのです。天井も、壁も、何處から何處まで、ダイヤモンドで出來てゐました。黒姫と羊は、びつくりしてお互ひに顔を見合せました。

すると、また何といふ不思議な事でせう。黒姫は白い、白い、乳のやうに眞白い、きれいなお姫樣になつて、立つてゐました。そして羊は立派な、立派な王子になつて、立つてゐました。何處からか、森の女神の歌ふ聲が聞えました。

黒姫さん、あなたの優しい涙で、あなたの罪はゆるされました、

羊さん、あなたの優しい涙であなたの魔法は解かれました、

王子と王女さん、お二人は樂しく〳〵暮しなさい、

歌の聲は、次第に近づいて來ました。そして、遂に二人の傍まで來ました。森の女神たちは、二人を取圍んで、この歌をうたひ續けました。この時から、黒姫と羊の王子とは、一生がい變らない仲のよいお友達になつて樂しく〳〵暮しました。（をはり）

さァさァ學校へ
いそぎませう

若山牧水

百舌がきいく、
雀がちうく、

向ふの樹もこつちの樹も
みんな風でさァわさわ

さァく學校へ急ぎませう。

幼年詩

虹（賞）

福岡縣戸畑尋常高等小學校
第六學年　竹内萬壽雄

虹が出たよ
青いのに赤いの
あの上通つて見いたいな
どこまでつづく
山から里へ
まあ〳〵ほんとに美しい
通つて見いたいな
虹よ虹よ
あら消えちやつた

星（賞）

山梨縣四上九一色尋常小學校
第五學年　土橋千

キラ、キラ、キラ、キラ
お前は何だか
そんなに高く
よく落ちないで
私はほんとに
太陽がはいつて、
ぬれた時、
光を見せる。
夜もすがら
羽根があつて、
行けたならば、と
考へる。
何だらう。
瞳の樣でもあり
キラ、キラ、キラ、
小さい星よ。
知らないが、
空の中に、
光つてるな、
不思議に思ふ
草が夜露に
お前は小さい
キラキラキラと
もしも私に
お前の所へ
私は時々
一たいお前は
天人の
金剛石の樣でもある
小さい星よ。

ポスト

福岡縣戸畑尋常高等小學校
第六學年　山本清

ポスト　ポスト
雨にぬれて
口をあけて
何が欲しい
赤いべべに
赤いしやつほ
ポスト　ポスト
朝も晩も
ただ立ちどほし
さぞやあんよがだるからう

からす

福島縣東郡石井小學校
第六學年　松田良隆

夜あけのからす
一聲なけば

お星樣が消える。
二聲目には
お日樣がキラ〳〵。
ご飯がすんで登校の時に
一本杉のからすを見たら
顏も洗はずにぼんやりと
今朝のやうにないてゐた。

夢

福岡縣戸畑尋常高等小學校
第六學年　大尾勝好

空がくもつた
雨がふるぞ
大雨小雨
道ですべつて
ころんで目がさめた

秋の雲

東京市芝區愛宕下町一丁目
野村金次郎

よく晴れた秋の日曜、
明日のさらへをすうまして
いつもの土手へやつて來た。
草をまくらにゴロリンと
あふむけ樣にねころんで、
空行く雲をながめてる。
走るよ走るよ秋の雲
飛行機よりも早かろか、
雲は一體何んのために
あんなにいそいで走るのか、
西の森へと日は入つた、
鳥が三羽四羽飛び出した。

おいなりさん

三重縣四日市西新地森方
井上ハジメ

おいなりさん。
赤い鳥居。
一つくぐつて。
いないいないばあ。

青桐

宮城縣佐沼町小金町六番地
渡邊康雄

桐よ桐よ青桐よ
なぜにそんなに背が高い
それより肥えて背が低く
風が吹いても動かずに
雨がふつてもゆるがずに
ぢつとこらへる桐になれ、
桐よ、桐よ、青桐よ
手のひらのよな青い葉に
なぜにそんなに穴があく
蟲にくはれたためなのか
お前のその背が低いなら
私がこの手でぬうてやろ。

童謡

なつめの坊主

東京　山田邦臣

風が吹くのか
木の實が光る、
金の小坊主
銀の小坊主
青い實が熟れてきた。

郵便脚夫

東京　倉田賢二

いつもにこにこ、郵さんの
郵便脚夫は夕やけの
向ふの坂を飛んでゆく
小ちやく小ちやく飛んでゆく
鼠びと

戸毎に撒いて飛んでゆく。

きりぎりす

東京　山田貞治

青いいろの眞ッ綿
長いお鬚を垂して。
金のラッパ、銀の笛。
きりきりきりきりきり
吹いてるるきりぎりす。

時計

曲蘆　鳴　木碧

ちんちん
たえまのない時計
山に黄ろい月が出て
黒い小人がぞろぞろそろひ
だまつて段々町に來る
夜が來る
ちんちん

たえまのない時計
海にまつかい日がのぼり
赤い小馬がばかばかつづき
夢中にかけて町に來る
朝が來る

山みち

東京　伊藤葩流子

こゝは山路白い路
白いお馬車でがたがたがた
屋根に止つたはだあれ
白い山鳩がククク
路の小石のかたはらに
まつかいお花がちよんとさいた
森が出た出た大きい森が
森のかげには白い家
白い家からけむりがのぼる
あすこに森の小母さんが
早くおいでと呼んでるる。

綴方

ぽちと子犬（賞）

朝鮮大邱公立尋常高等小學校五年生　三島千里

家にはぽちといふ黒いめすの犬がるる。くびの所に白い毛があるだけで、あとは眞黒だから、はじめの内は熊といつてるたが、僕がぽちとかへてやつたのである。

ぽちははじめからやせてる て、他の犬とけんくわをするとぢきまけて「きやん〳〵。」となくので、僕は友達から馬鹿にされてるる。それで僕はどうかして強くしてやらうと、牛肉が残るとそれをくれてやる。九月二十一日頃からちゝの所がふくれてきた。子供が生れるのだらうと思つたから、それからは尚のこと、ごはんをたくさんやつたり、じゆくしをやつたりして、樂しみにして待つてるた。

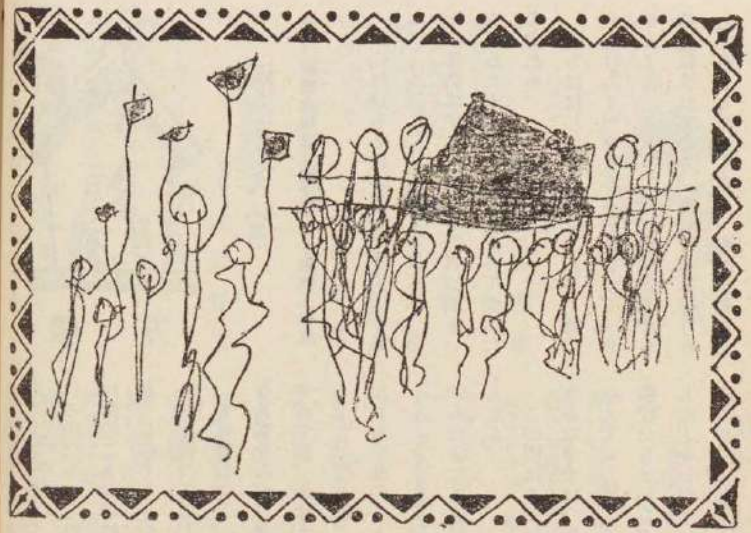
十日程たつと、ぽちはかはいゝ子供を八匹生んだ。黒いのが六匹でたいしやが二匹、おすが三匹、めすが五匹るる。どれもまだ目があつてるなかつた。たゞおや犬のちゝに吸ひついて、「うゝ、うゝ、」とうなるばかりであつた。僕等がちつとでもさはると「きやん〳〵。」となく。

この頃はもう目もあいて、小屋の中をあるきまはつて運動する。もう歯も生えて、ごはんを食べるやうになつた。學校からかへるとお母さんからおくわしなどをいたゞいて、ぽちや子犬にやるのが、この頃の一番たのしみである。

ひよつこ（賞）

福島縣東白川郡石井小學校六年　松田良隆

鶏に卵を抱へさせてから、一日二日と母は毎日歎へてるた。二十一日目に母の言ふ通り可愛い、ひなが十一羽生れた。灰色のや黄色の、頭が白く背の黒いの、それは皆毛色が違つてるた。親鳥かココ……となくと、ピヨ〳〵と危い足取りでかけ寄る、それがたまらなく可愛かつた。夕方になるときめられた巣に戻つてきて、十一羽のひなを腹にかかへてねむる。或る夜一匹のひなが親鳥からはなれてるたので、そうつと腹の下へ入れてやらうとしたら、親鳥が僕にとびかかつた。たしか、ひなを僕に取られるのかと思つたのかも知れない。夜中ねむらずに居るんだらうか、こうして幾日かが過ぎた。ひなも鳩ほどになつたので柵の外へ出した。



「お祭り」　信州　白川光雄君作

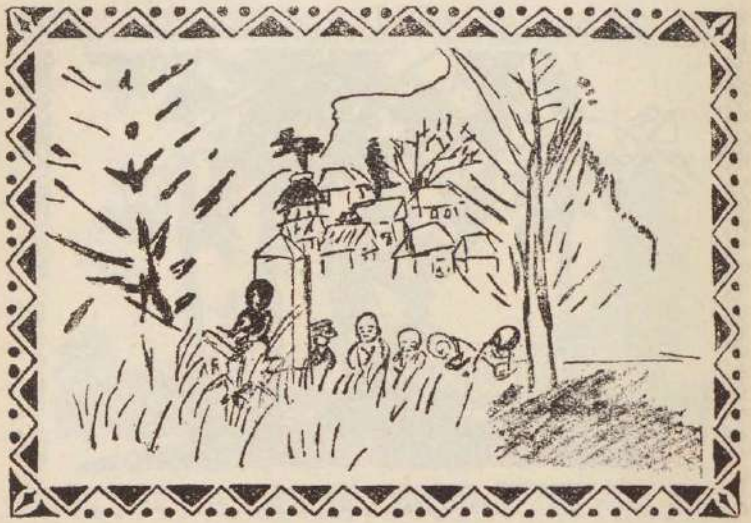
もう大喜びで田甫の方へとんでゆく。暫らくすると、ピピ……、コケイ〳〵〳〵と云ふけたたましい鳴き聲がしたので急いで行つて見た。「良ちやん、ひながイタチに取られたんだよ」と馬草刈りしてゐた正ちやんが言ふ。あゝ、しまつたと思つたが仕方がない。メス二羽取られたんだ、母も僕もがつかりした。明日はよくかんとくしてゐるやうと思つたが、遊びにまぎれてゐたため、やつぱりメス二羽取られてしまつた。

それから柵の外へ出さなかつた。殘りの七羽のひなが鳥屋に買はれて行つたのは、三日目の夕方であつた

私の大好きな先生

小石川西丸町二八聖學院一年生　皿田生江

私共の學校の先生は皆御優しい、よい先生ばかりです。其の内取り分け私は印東先生と云ふ英語の女の先生が大好きです。今年英學塾を御卒業なさつた、まだ御若い先生です。女の兄弟の無い私は印東先生の樣な御姉さまが欲う御座います。此の間上級の方へ「私あんな姉さんなら十人あつてもいゝわ」と云つて笑はれました。私の級は英語が六時間あつて二時間は西洋人の先生で、四時間は印東先生です。私は印東先生の英語の時間が一番たのしみです。私はいつも〳〵此のよい世界で一番大好きな、印東先生に、大好きな英語を敎りながら、卒業することが出來る樣に神樣に祈ります。私も大きくなつたら、印東先生の樣な先生にならうと思ひます、ほんとに印東先生はよい先生です。



「寫生」　岸野尋常小學校　某君作

蠅取り蛛蜘

愛知縣八丁高等小學校一年生十四　松下光雄

ブーンとうなりながらとんできた蠅が敷居の上へとまつた。と、前からよい得物がないかとまつて居た蠅取り蛛蜘は、しばらくは手や口を動かして居たが、何か決心したと見えて、段々と蠅の方へ〳〵と近づいていつた。刻一刻とはへの運命は風前の燈火同樣である。はやくも二三寸前まで近づいて、はたととまつた蛛蜘は又前の樣に何か考へてゐるやうであつたが、突然蠅を目がけて飛びかゝつたそ。して蠅をくわえて巢の方へ行つた。

□佳作　△お姉樣の御手紙（朝鮮水津藤野）△本泳の慰出（朝鮮有馬陵二）△おばあさんの編氣（朝鮮愛瀬茂雄）△トミチャン（仙臺高橋きくよ）△秋の夜（山梨土橋千）

「樂園」信濃上伊那郡宮田小學校尋二男　白川光雄君作

通信

□私も今度本誌の愛讀者になりました。いつしやうけんめいに綴方や繪を投書します。島崎藤村先生の御子さんの雛二君は僕の友達ですから、本誌は私にとつて何となくしたはしく思はれます。（東京　今村重雄）

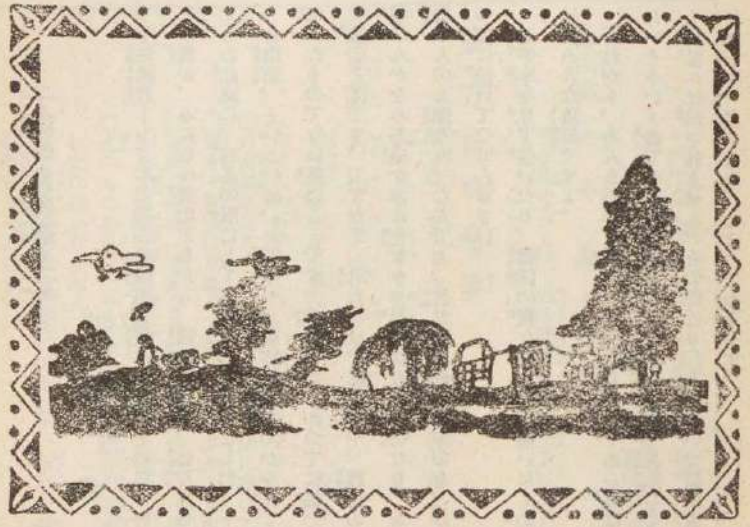
□島崎先生や有島先生の御感懐は何よりも喜ばしく思ひます。兄さんや姉さんもさうおつしやいました。私たちは有島先生の「蘭畑園」や、島崎先生の「坊ち者に」を愛讀いたしました。（東京　高岡米三）

□「金の船」に御のせの野口雨情さまの童謡は面白ちございます雨情さまは只今どちらにお住ひでせうか。他の雑誌にも雨情さまのお作が見えますが鈴虫の鈴を一番面白いと思ひます。殊に青譜がありますから大層よろしうございます。（愛讀者の母より）

野口雨先生の御住所は水戸市銀杏町到紅館方です。（記者）

□「金の船」の創刊號を拝讀致しました。

岡本先生のさし絵は一層を通じて同じ筆なので本が高尚に見えます。若山先生の「秋のとんぼ」は涼しい童謡です。「泥棒と犬の子」は意味深いものでした。「小鼠の話」は小學校の生徒によろしい。「ゆヤクと豆の蔓」の様な記事も必要です。「馬鹿七」は滑稽です。自由畫は驚嘆です。子供のめ情の發露は字句より



「景色」信濃上伊那郡宮田小學校尋一男　橋倉良一君作

畫にありますから。（東京　伊藤藤子）

□金の船といふよい雑誌が出ました。子供のためにうれしく思ひます。一讀して得た感想なり希望なりを、申し上げて見ますよいと感じた所

1、活字の組方に變化あること。2、挿絵の子供らしくてはつきりとして居ること。3、文章の清新な點。4、時々可笑味のある絵と文とを挿んだこと。

これはどうだらうと思つた所

1、子供にとつて少し難しすぎはせぬかと思ふ漢字や、語句の交つて居ること。2、漢語に觀念的の假名を附けてあるのは寧ろ假名で書いた方がよくはありませんか。例へば縊鬼（ひよつくり）喫驚（びつくり）大切（だいじ）とれは大事と書くべき希望する所

1、文章の清新な所は大變嬉しく御感います。尚子供の純な感情を陶冶するに一律に流れないお話と書き方とをして下さい。2、子供らしい絵畫にみちてゐるのは、たしかに本誌特色の一です。二十頁、六十三頁に出してある樣なものを絶やさぬやう。3、寡筆された子供の文章や大人の童話などはあまり多く掲げないで、活字も小さくして下さい。4、曲譜を寡筆して下さいませんか。金の船が内容形式ともに整理され發展して行くのを心から祈ります。（編輯部　トム生）

□童謡佳作　入形の絵（京都河合起風）トマト畑（大阪小野綠星）芋の葉（東京村松道彌）ぼろ草鞋（静岡森野貞一）お山の小雷（北海道佐藤寅龍）お塩（名古屋岡田義雄）電車ごつこ（東京岡田常藤）天の川（兵庫西島精雪）（記者より）

□坊年詩佳作　秋（東京皿田生江）金の鈴（兵庫山下末子）地蔵様（東京長崎文雄）お山の坊主（熊本土方榮一）秋の日（大阪牛島ミヨ子）（記者）

子供の自由畫を募る

山本鼎

子供諸君――こんど、この雜誌で君たちの畫をいたゞいて、僕が、みんなの畫のうちから、選むだのを、毎月四つぐらゐ此處に、寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雜誌の畫なんかを見て描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから、君たちは、お手本や、雜誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顏なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらんなさい。

お手本を見て描いたり、雜誌の畫なんかみて描いたものは、みんな落第ですよ。

それから、あんまり、うすく、ほんやりかいてある畫はたいそういゝ畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雜誌へは出されません。そのかはり、そんないゝ畫は僕が欲いて、だいじに、しまつておきます。

□十二月には、島崎先生も有島先生も書いて下さる事が出來ませんでした。島崎先生は東京朝日新聞掲載の小說がまだ終らなかつた爲に、有島先生は二科會などの御用でお忙しかつた爲に。併し兩先生とも新年號には必ずお執筆になります。(記者)

□讀者諸君から、いろ〳〵の御助言を賜つた事を深く感謝します。一々掲げたいのですが、紙面に餘裕がないため省略しました。こゝに篤く御禮を申上げて置きます。(記者)

□今度少年少女諸君から募集する「童謠」を「幼年詩」と改めました。「童謠」といふ言葉にとらはれて、大人のまねをした、子供らしくない詩が多く集つて來るからです。もし、少年少女諸君が此のまゝ「童謠」といふ一つの型にとらはれて詩を作る樣であつたら、とんでもない事になると思ひます。少年少女諸君の童謠は、あくまでも子供らしい、純な心持を歌つたものでなければなりません。そこで「童謠」を「幼年詩」と改めました。(記者)

□創刊號以來毎號本誌の爲に面白い童話を發表して下さる沖野岩三郎氏の童話集『熊野詣り』が出ました。親孝行な鈴丸と云ふ可憐な少年の話を初めとして十五六種の童話を納めてありますが、全篇を通じて眞面目な中にも可笑味あり可笑味の中にも涙のこぼれるやうな、幾度讀んでも興趣のつきぬ作ばかりです。是れまで童話集は歌へ切れないくらゐ出てをりますが、未だ嘗て氏の如くほんとうに子供を理解してゐる作家に依つて書かれたものは見たことがありません。氏は基督教の牧師です。この作物の中に流れてゐる純な感情は驚嘆氏の人格の反影です。クリスマスの贈物としも好適なものだと思ひます。(定價壹圓・發行所　京橋尾張町　砂隆社)

□少年少女の創作募集

(原稿は東京市本郷區根津宮永町廿九番地齋藤佐次郎方「金の船」編輯所へ送つて下さい)

自由畫　山本鼎先生選

自由畫のことは、山本鼎先生が、卷頭に書いて下すつたから、ごらん下さい。

綴方　編輯局選

綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、ふだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

幼年詩　若山牧水先生選

幼年詩は山なり森なり花なりを見て、感じたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

□自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に畫いて下さい。

□綴方、童謠は用紙も字數も、みなさんの自由です。

□住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。

□人のものを眞似たり雜誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。

□よく出來たのは、雜誌にのせます、中でも優れたのには賞品をさしあげます。

□定價一冊貳拾錢　送料壹錢
□三ヶ月分三冊(送料共)六拾錢
□半年分六冊(送料共)壹圓貳拾錢
□壹ヶ年分十二冊(送料共)貳圓三拾錢

振替口座東京參〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいたします

(送金の注意)

▽御注文には必ず前金で御拂込み下さいう送金は小爲替でも切手代用でも宜敷
▽切手代用は(壹錢切手)一割增に願ひます
▽御注文の場合は單何卷第何號よりと云ふことを明瞭に書いて下さいください
▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きく

大正八年十一月四日印刷納本(毎月一回)
大正八年十二月一日發行(一日發行)

東京市本郷區根津宮永町二十九番地
編輯人　齋藤佐次郎

東京市神田區飯田町六丁目二十六番地
發行人　横山壽篤

東京市京橋區弓町二十五番地
印刷人　高橋都

東京市京橋區弓町二十五番地
印刷所　三協印刷株式會社

東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行所　キンノツノ社

大正八年十月十六日　大正八年十一月廿日印刷　編輯兼發行人　東京市麻布区鳥居坂町二番地　金の船社
（第三種郵便物認可）　大正八年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

清新の香味最もなつかしき

ライオン煉齒磨

（チューブ入）

◉やさしい香氣
◉やはらかな齒ざはり
◉すぐれた效果
◉美しい容器
◉使用簡便

お子様方の御使ひ料に最も適してをります。

東京　キンノツノ社　發行